東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

羊毛の文化史(二) : 第三篇
フランス国に於ける羊毛文化

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 1978-01-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/628

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

羊毛の文化史（二）

――第三篇　フランス国に於ける羊毛文化――

山根章弘

第一章　中世文化の空白
中世フランス中都市の活気
羊毛史料の空白
中世フランス人の服装
歌物語『オーカッサンとニコレット』
第二章　中世末期・女性の服装
二つに切った毛布
遊女の服は黄色がきまり
第三章　十五世紀・女性の服装
フーケの『聖母子』
フランスに特長的な上半身露出
第四章　十六世紀・フランス人の服装
われらの羊にもどろう
露出的な上流と質素な庶民
第五章　十六世紀後半、フランスの衰退
『パニュルジュの羊』
露出の素肌と入浴
荒廃の国土を再建するアンリ四世
第六章　十七世紀　表向きの華麗さ
皇太后マリー・ド・メディシス
フランス農民の困窮
第七章　太陽王ルイ十四世の「大御代」
財務総監コルベールの手腕
毛織物商などの繁栄
十七世紀後半・新興成金のブルジョワ趣味
華美な流行の陰に、農民は……
第八章　十七世紀末、フランスの羊毛離れ
ルイ十四世、新教徒を弾圧
技術者の群れ「ユグノー」国外へ
ヴェルサイユ宮殿と好戦的な国王
偉大な文学者シャルル・ペロー
十七世紀末の農民たちの姿
上流階級独占の服装

第一章　中世文化の空白

中世フランス中都市の活気

英国は牧羊の国であり、原毛生産の国であり、羊毛加工産業の国であり、優れた羊毛加工品の輸出国であった。――その優秀な原毛や加工品を輸入して、加工したり消費したりするのは、主として、ヨーロッパ大陸の諸国であった。

中でも、フランス中部にある小都市は、そんな輸入や交易にとっては要衝の土地柄であったために、年に何回かの市（バザール）が開かれて西のスペイン、南のイタリア、北のフランドル、西の諸国などや、海外諸国からの物資がそこで取引きされて、中世末期には大変な賑いを見せて発展していった。――十四世紀、北フランスの中都市の姿を生き生きと写した史料がある。その賑いを見てみよう。――

＊

町には種々の建物が立ち並び旅館や居酒屋が軒をつらね、また商人や手工業を業とする家も数多く並んでいる――パン屋あり仕立屋あり金銀細工師や大工の家があり家具屋あり陶工の仕事場があり、それに交じって、織布工や縮絨工や染色工の仕事場も少なくない。どれも一階は仕事場で、二階以上が親方とその家族の住いになっている。染色の仕事場では、大きな釜に取り組んでいる職人たちを、後ろで親方が監視しているというような当時の銅版画も残されている。

二

広場の一隅では、羊の毛皮をかぶった男たちが、手にした鐘を、ジャラン、ジャラン、と鳴らしながら先頭を切って歩いてゆく。その後からは、大きな袋を重そうに肩に担ぎながらフラフラ歩いてゆく男たちの姿がある。――この大きな袋の中には、羊の原毛がいっぱいに詰まっているのである。彼等はこの羊毛の袋を、織布工の家に運びこんで行くのである。

とにかく、広場は大変な人ごみである。市場が並んでいて、それぞれの仕事場の人が、手仕事で仕上げた製品を店の前で売っているほかに、各地から集まった商人たちがひしめき合っている。――毛皮商あり、砂糖や香辛料の商人あり、小間物屋あり、毛織物の商人も、もちろん少なくない。

シャンパーニュ地方の六つの都市が、特に地の利を得て、国際的な取り引きの場所としての定期市で繁栄した。

地方の都市でさえ、このように繁栄した。中央の都パリの賑いは、当然のことである。既に十二世紀の後半には、特に、サン・ドニ通りの沿道を中心に大変な賑いを呈していた。毎週土曜と日曜に、この沿道の西側には市場が開かれ、付近の農民たちは、自分たちの作った農作物や手製品を持って来て市場に並べ、サン・ドニやボーヴェーやカンブレーの毛織物商たちも、彼等の商品をもって来て、この市で売り出す。地元の商人や手工業の職人たちは、自分の店を閉めて市場に集まって、そこだけで売買すること、と国王から命じられていた。――日常生活必需品の羊毛加工品は、大事な商品であり、大きなウェイトを占めていた。――毛織物の取り引きは、やがて独立してゆく。――パリの町の発祥の地と

考えられているシテ島には、タテに通じる道路があって、西の道路はやがて、「織物商通り」と呼ばれるようになった。（現在の「裁判所大通り」である）。東の道路は、貨幣の両替屋や金貸しなどのユダヤ人の商人が並ぶようになったので「ユダヤ人通り」と呼ばれた。――しかし、十二世紀末から十三世紀初めのフィリップ二世の時代ごろから、このシテ島がフランス国政の中心地となってゆくために、ユダヤ人は追われてセーヌ右岸に移り、同時に織物商もセーヌ右岸に移動して、やがてセーヌ右岸は新らたな商業の中心地となってゆく。

（この項は木村尚三郎氏の記述などを参照にした）。

羊毛史料の空白

太陽王ルイ十四世以来の華麗な国フランス、という国土になるまでには、それ以前に、やはり、長い長い何百年もの暗黒の中世時代が、ほとんど何の変化もなく続いていた。――どこの国でも同じ現象であった。そして、この千年にも及ぶ中世の文化は、空白、といっていいほど、それを正確に知る史料は極めて少ないし、又、何百年の間、ほとんど変化や進歩を見せていないようである。

*

羊はたくさん放牧されていた。イングランドの国土ほどではないにしろ、麦畑に接した牧羊地や山地で、羊は群れをなして、放牧されていたようである。

十二世紀末ごろに完成したアミアン大聖堂の西側正面入口の上には、焚火で煖（だん）をとっている羊飼いたちの姿が石に彫り上げられている。教会の聖職者が「迷える羊の群れ」の世話をする「羊飼い」を意味していたから、羊の姿を描くことは当然かも知れないが、実は、その羊の群れや羊飼いの姿が、たえず身の廻りにあって常に目に触れて親しいものだったからこそ、この教会の羊群や羊飼いの絵画や彫刻も、一般民衆にやさしい親近感を与えたのであろう。

羊の群れや羊飼いの姿は、よく目に触（ふ）れるものであった。前述した北フランスの中都市でも、十四世紀に入った頃でさえ、立派な建物の立ち並ぶ町並みの間の汚ない道路の上を、羊の群れがのんびりと通り過ぎていったり、牛がのそりのそりと歩いていたり、豚が臭（くさ）い匂いでかたまっていたりして、人混みの中を、わがもの顔でのさばっていたようである。――羊がいることは当り前のことだった。だから「農民たちは、羊をちっとも恐れないと同じように、神様を恐れなくなって聖なる教会のきまりにも目もくれようとしない！」などと、十三世紀のゴディエ・ド・コワンシーという聖職者が歎くことになる。

各領地の領主の邸宅のまわりには五〇人から五〇〇人ほどの農夫が集まって村落を形作り、領主に権利金を支払って、領主の領地の中で、牛や羊を放牧したり、狩漁をしたりしていた。

羊が数多くいる、ということは、食料としての羊肉があった、ということの外に、当然、その羊の毛を糸に紡いで織って衣服として着た、ということをも意味する。

何故、今更こんなことを私が言い出すのか、と言えば、実は、羊毛加工品については、ほとんど、どの歴史の著述にも史料にも、何ひとつ触れてはいないからである。試しに、英語でもフランス語でもドイツ語で

も、とにかく諸国語で書かれた服装の歴史の本を開いて読んで見るとする――絹やレースや金銀の刺しゆうや宝石のことは実によく記述されているのに、肝心の、基本であるところの服の材質のこととなると、全く、と言っていいほど、何も記述されてはいないのである。――途方に暮れてしまう。私は、数ヵ月もの間、羊毛や羊毛製品という「ことば」や記述を探して、何十冊の資料をあさりつづけたことであろう。――そして結果はゼロ。……無駄骨であった。

しかし、逆に考えれば、何千年もの間、羊毛に関しては何も記述されなかった、ということは、それほど「羊毛」や「羊毛加工の製品」が日常あたりまえのことになっていて、まるで空気か又は毎日飲む水や毎日食べるパンと同じように考えられていたからだ、と気がついた。――つまり「羊毛」は、誰れでもが、いつ何処ででも身に着つけていて、それは何ひとつ珍らしいことではなかったことだったからである。――羊毛はそれほど一般化し普及していた、という強力な証拠なのであった。

＊

そんな空白の中で、珍らしい記録が一つだけある。

ピレネー山脈のバスク人を撃ち破ってフランスを救った中世の英雄「シャルルマーニュ」（カルル大帝）（七六八年―八一六年）の服装を、アインハルトという人が記述している。

「シャルルの服は少し変っている。肌に直接つくものは、リネンのシャツの半ズボンとウールの肌着。このウールの肌着は絹で縁どられている。ズボンは脚を被っていて、上は帯で締められている。足には革の靴をはき、冬には身体にピッタり合ったカワウソかテンの毛皮の外套を着る。……彼は毎朝、服を着ながら臣下に接見して事件の報告を聞いた。……」

＊

王といえども服装は素朴であった。ウールの布地は染色されていなかったに違いない。――何故ならば、このシャルル大帝をリリカルに謳い上げた中世最初の叙事詩『ロランの歌』“Chanson de Rolain”には、「色彩」があれば必ず、白とか赤とか青とかと色感豊かに描写しているのに、衣服に関しては、絹やビロード以外には何一つ色彩描写をしていないからである。――つまり、羊毛加工の布地は、染色されない生のままの布地だったのだろう。羊毛の染色の項でも述べたが、羊毛の染色は極めてむずかしいことだった。余程の豪奢な王だけが緋色の羊毛製品を王者の誇りとして身に著けた。

平常は、いつも染色しない生の地のままだった。フランス語で、漂白しない羊毛の地のままの自然色の色合いのことを beige（バァージュ）という。漂白しない羊毛の布地のことも同じく beige というが、この色合いは、西欧の人たちにとっては実に実に長い間、日常見なれた身近かな色合いであった。淡い褐色のような羊の色――これは、日本の風土には見かけることのなかった色彩感覚であった。

洋服が普及してきた昭和中期以降、日本のファッション界は、この色彩を日本国に採り入れるとき、これに当る日本語が判らなくて、フランス語の beige「バァージュ」、英語になったのが beige「ベイズ」、この二つの発音を合わせてそのまま日本式に「ベージュ色」と呼んだ。

羊の群れや羊毛皮（ムートン）や漂白しない羊毛布地などと、ほとん

ど縁のなかった日本人は、このページュ色、という色調に、その由来のことは判らなくても、何だか一種強烈な魅力を感じた上に、そこに西欧的な文化的センスや薫りを見出した。——羊群のいない国土の中の「羊毛文化」である。

中世フランス人の服装

中世フランスの一般農民はどんな服装をしていたのだろうか？

種々の史料を整理して見ると、大体次のようであった。

村落の家々では、農民たちや狩猟の人たちは、野菜や肉を自給自足していた。彼らは、羊を放牧して、その羊毛を紡いで、自分たちの手で織って布にすると、それを衣服に仕立てて身につけた。また麻も紡いで布にした。

しかし、羊毛の加工という仕事は、ある程度の専門的な技術を必要とした。フランスの村落にも、織物の仕上げ職人や染物職人などが住んでいて、彼らはお互いに補い合っていた。

西暦八世紀ごろから十三世紀ごろまで、一般農民の服装には、ほとんど変化がない。——彼らは、各家庭内で紡がれた羊毛製の上衣やブラウス、時には羊皮や革の上衣を着て、腰のところをベルトで締め、ベルトには仕事用のナイフや財布や鍵や道具まで吊していた。そしてズボンをはくようになり毛織りの靴下をはいた。その靴下は中世末期になると、腰のあたりまで届く長いものになってしまった。肩には羊毛製の外套やケープを羽織り、頭には毛織りか羊毛のフェルトか毛皮などの帽子をかぶった。

女は、ローマ時代とちがって、長袖のついたタイトな服を裾長に着けた上に、肩から膝下まである上衣（エプロン）か、腰から下げるオーバースカートをつけ、頭髪は頭巾（ヴエイル）で被った。これらの被服の素材は、ホームスパン（農家手製）の麻か、漂白精製していない生のままの羊毛のどちらかであった。——つまり、ベージュの布地であった。

＊

以上のような素朴な庶民の服装に対して、貧富の差がはげしかった当時としては当然の結果、富裕階級の人たちの服装は極めて華美に飾られて、自らを庶民と区別するステイタス・シンボルとした。

一二三七年ごろ、オルレアンの若い学者ギヨム・ド・ロリスによって書かれ、彼の死後四十年経ってジャン・ド・マンがその後半の大部を書き上げた華麗な恋愛詩（ロマンス）『バラ物語』の中で、きらびやかに着飾った女房のおめかしにあきれ果てた亭主どのは腹を立てて女房に言っている——

「そんなに飾り立てて一体どうするのだ？その高価な上着、奇妙な仕立ての服、お前の気取った笑いが、私にどれだけ得になるというのだ——こんな金糸の縫い取りのついたリボンで髪を結んだり、ねじったり、ほんとに気になる！……この高価な織物、ひだをつけた裾飾りやひだ襟、それにお前の腰のまわりを飾るその帯。それには真珠が縫いつけてあるのか！……」

中世末期になると、はじめて「ハイヒール」が流行する。当時の道徳家たちは渋い顔をして咳く、

「女たちは、機会を見つけては、そのチャンスを逃さずに自分の裾を二〜三センチも持ち上げて、美しいくるぶしと華奢な靴を見せるのだ！」

＊

貴婦人たちは、長いリンネルのシュミーズを肌に着けた上に毛皮で縁取った長い服を着けて、その裾を床にひきずり、更にその上に、ブリオーという膝まであるゆったりした上衣を着け、来客でもあると、ほっそりした細い姿に見せかけようと、腰の部分を紐でかたく締めつけたようだ。床に引きずる程長い裳裾であったから、歩くときには裳裾を持ち上げなければならないときもあったことだろう。——しかし、日本のキモノ姿と同じで、裾からチラリとこぼれる白い脛（はぎ）は、空を飛ぶ老仙人が地上に墜落するほどの強烈なエロスだったにちがいない。羊毛製の衣の下から露わにされたうら若い美少女の素足とふくらはぎの一瞬の輝きが、瀕死の男性を死から立ち直らせた話が、実は中世の歌物語として有名な『オーカッサンとニコレット』の中に、エピソードとして謳われているのだ。フランス北部で十二世紀末か十三世紀の初めに韻文と散文で作り上げられた、この優雅で人間的な作品は、「古典復興にはるかに先行する文芸復興（ルネッサンス）の早咲きの花である」と『ルネッサンス』の著者ウォルター・ペーターを絶讃させた夢のような愛の物語である。

歌物語『オーカッサンとニコレット』

『オーカッサンとニコレット』は、オーカッサンという若い美男の王子と、ニコレットという輝くばかりの美少女との愛の苦難と遍歴の大ロマンである。（ロマンスとかロマンとかロマンティックという言葉は、数多く伝承されうたわれた中世の歌物語「ロマンス」を語源として生れていることは御存知のことであろう）。——その中の一挿話を紹介する。

＊

リムーザンから一人の男の巡礼がある村に来たが、重病にかかってベッドの中で苦しみもだえていた。死期が迫っているようだった。王子オーカッサンは手の施しょうもなくオロオロしているところへ、「面輝ける乙女」ニコレットが清らかにあらわれた。この美少女は、病人の目が届くところまで進んでゆくと、先ず長く床まで垂れていた裳裾を引き上げ次に紹の毛皮でふちどられたガウンを引き上げ、最後に真白な亜麻の下着も上に引き上げた。輝くばかりに白く可愛いい脛（はぎ）が病人の目に飛びこんだのだ。——すると、驚くべきことが起った。美少女の真白い素足を見た途端、瀕死の巡礼男は、突如、さっと病床の上に起き上ると、しっかりした足どりで病床を離れ、十字架を手に持ち直して、この小舎を出て行き自分の郷里に帰って行ったのである。——少女の白い素足の瞬時の露出が、病気を全く追放してしまったのだった。

そんな往時の事件を回想して、牢に捉われていた王子は歌う、

〜やさしき乙女、百合の花、
めぐしや、往き来のその姿、
めぐしや、戯れ遊ぶさま、
めぐしや、言葉、愛敬よ、
めぐしや、接吻、香りよな。

……

（訳・岩波文庫版）

この乙女は、黄金色の小さく捲いた髪、輝きを帯びて笑みをたたえた眼、面長の顔呑、高く坐りよい鼻、夏の頃ほいの桜んぼも薔薇も及ばぬ深紅の可愛ゆらしい唇、白く小さい歯を持っていた。そして彼女の衣裳の下には丸い果実が二つ並んだように二つの乳房が張りつめていたが、胴のあたりは両手で握れるほどにかぼそかった。乙女ニコレットは、城の中の一室に軟禁状態にあったが、若殿オーカサンの身の上に想いをはせて、ある初夏の日の夜半、見張り役の老女が眠っている隙を見はからって、この城の中から脱出をはかる。手許にある最上質の絹の上衣を着けると、臥床の敷物やハンカチを結び合わせて出来る限りの長い綱を作ってこれを窓の柱に結びつけ、その綱を伝って庭に降り立つ。一方の手で着物の前を、他方の手で着物の後ろをとって、草の上の露に濡れないように裳裾の裾をたくし上げながら、庭の彼方へと立ち去るのだった。

――美しい月夜の幻想の中の一幅の絵のような描写ではないか。

＊

乙女ニコレットは、野獣や蛇のいる森の中を、恐怖におそわれながらさまよって行くが、睡気におそわれて、深い茂みの中に身をかくしたまま眠りこんでしまう。

翌朝、六つをはるかにすぎた頃――その刻限になると、羊飼いたちは町から出て来て、森と川の間に羊たちを放す。そして羊飼たちだけは、森の端の美しい泉のそばに集って、草の上に大きな外套をひろげてパンを食べ出す。小鳥の啼き声と羊飼いの叫び声とでを目さました乙女ニコレットは羊飼いたちの前にあらわれる。彼女は羊飼いたちに若殿オーカッサンへの伝言を頼んで立ち去る。――この羊飼いたちが、その後の二人の運命にとって大事な役割を果たして行くのであるが、中世末期のフランスの風土には、森あり川あり山ありの情景の中に、点々と羊が放牧されていたことが、このロマンスの描写の一例でも推定できるのである。それは、なだらかに丘から丘が重なり広がる牧場風景とは一味ちがった、縁蔭の濃い北フランスの風物詩でもあるのだ。

羊は、麦畑のそばにも居た。同じ『オーカッサンとニコレット』の後半で、一人の羊飼はい言う、

「わしの牛や羊が、他人様の牧場や麦畑に入りこんだのが見付かったときには、城主さまを別にすれば、どんなに偉い人だって、こいつを追い出すほど大胆な御仁は、このフランス国中には一人もいない」。

牛や羊への愛情が人情一般になっていた、ということは、中世末期までは、フランスでもやはり、一般の人々は羊とは切り離せない生活をつづけていたことの証拠であるし、羊毛を手作りで紡いで織って身につけていた証拠でもあろう。――フランスの国にとって牧人（羊飼い）の役割は見逃せない。十五世紀、フランス国を危機から救った少女ジャンヌ・ダルクは、実は、オルレアンの羊飼いの娘だったのである。……しかし、彼女が処刑された辺りから、フランス国は次第に羊から離れてゆくようになる。――それは後述する。

第二章　中世末期・女性の服装

二つに切った毛布

中世後期、十二世紀から十三世紀にかけて、フランスでは、いくつかの諷刺文学が作られた。その諷刺文学の中に、小さな寓話を集めた『ファブリオー』という作品がある。『ファブリオー』の中の一篇〝二つに切った毛布〟"Housse Partie"を紹介しよう。

＊

父親から全財産をゆずってもらったために金持ちになった一人の町人がいた。ところが、その父親はすっかり年老いてしまったために、息子の妻は、夫をそそのかして老父を追い出そうとした。息子は、ついに、この老父を無一文で家から追い出すことに決めた。

着のみ着のままで家を出てゆくとき、老父は、せめても毛布の一枚だけでも欲しい、と訴える。毛布の一枚ぐらいは与えよう、おい、持って来い、と、一家の主人は自分の息子に命じた。

息子――つまり、老父にとっては孫になるが、その孫――は、一枚の毛布をもって来て、目の前でその毛布を二つに切って、その半分だけを祖父にわたした。

何故、お祖父さんに毛布を半分しか渡さないんだ？――と父親は詰問する。それに対して、父親の息子は答える。

――お父さん、あなたもやがて年をとったら、このお祖父ちゃんと同じように、この家を追い出されることになるのでしょう。ボクは、その時のために、あとの半分をしまっておくのです！

……

父親もその妻も、この言葉に胸を打たれ、結局、この有益な教訓が老人を救うことになった。

鞍の下に敷く毛布などのことをhousse（ウース）という。毛布一枚さえあれば、露天であっても雨露をしのぐことができた、という当時の生活の知恵を、この小話は雄弁に語っている。――更に私は、この羊毛の毛布一枚に、たまらない人情のあたたかみを感じて、この話が好きである。ほとんど染色もしていないベージュ色の素朴な毛布。――そして毛布に限らず一般の服地もほとんど染色されていない「生なり」beize（ベージュ）のままだった。しかも、毛布に限らず服地も、一生長持ちするように紡がれ織られ仕立て上げられていて、よい服や毛布は、遺言によって大切に相続されることが多かったようである。――品質のよいものを次の世代まで伝える……日本の「きもの」と同じである。

最近のアメリカ消費文明の「使い捨て」の考え方とはちがって、西欧の生活文化財は、現在でも、祖母から母、母から娘、娘から子、へと伝えて行こう、という考え方がある。羊毛には「丈夫で長持ち」、という特長がある。我々も良質の羊毛の布地を一生愛用しつづけて長持ちさせたい、と思う。我が家の毛布も、今世紀初頭、多分、ロンドン市内で購入したものだと思うが、父が愛用していたものが、今でも私の身辺に置かれている。ウール一〇〇パーセントの品質は立派なものだと思う。ほとんど傷んでいない。

丈夫で長持ちした中世の羊毛製品に話を戻そう。ほとんど染色しない服地が一般化していたときに、庶民とは格段の栄誉の地位にあった領主

たちは、染色技術が序々に開発されてきていたこともあって、自分の家来や自分が召しかかえている騎士たちには、一般庶民とは違った、ハッと目につく色に染めた衣服を作って、公式の行事の際などに着用させた。自分の領土を誇示するために、各領主の好みの色で統一して、他の領土と区別した。この染色の衣服は、年に一回か二回、領主が家臣に支給した。つまり「お仕着せ」である。色によって、各領主の特色が打ち出された。

どこの国、いつの時代でも同じことなのであるが、このフランス国内でも、王侯貴族や富裕階級は服飾に贅を尽したため、その目に余る贅沢競争にストップをかけようと、例えば、一二九四年と一三〇六年に、贅沢禁止令が出されたが、他の国の場合と同じように、この禁止令は効き目がなかった。

フランス国民を窮乏の生活に追いこみ国土を荒廃させた一〇〇年戦争は、一三二八年に始まるが、英国軍の包囲の中にあった一〇〇年間でも、上流階級の人たちは服飾と邸宅のしつらえに贅をつくし、中流階級の人たちも「贅沢禁止令」を無視して、王侯の真似をして、毛皮で縁どりした真紅の長い袍衣（ローブ）を着たりしていた。――それに反して、一般の国民は、前の時代に引きつづいて簡素な身なりであり、胴衣（どうぎ）を着け仕事着を着、ズボン（キュロット）に長靴を履（は）く、という程度であり、パッと目に着く色彩感はない。

遊女の服は黄色がきまり

地味な一般庶民の中で、王侯貴族や大富豪の華美な服装を真似できるものは、売春婦だけだった。そんな考え方や風潮は古代からあった。――古代ギリシャの都アテネでは、「遊女」という存在は、日本の「おいらん」に近い評価があって、そんなに悲惨な存在ではなかったし又、男たちが美しいキモノや贅沢品で彼女等を飾り上げて特別の愛玩物に仕立て上げた、という点もあるが、とにかく、遊女は花模様の衣裳をつけて、一般女性の生（き）のままの羊毛の衣と、はっきりと区別されていたし、それにつづく古代ローマでも、一般女性の服 toga（トーガ）などとちがって、半分の長さの上衣や前のひらいた外衣を着けていて、「売春婦」の標識とされていた。

この風習のきまりは、中世にも受け継がれた。例えば、大聖堂のある南仏トゥールーズの町では、売春婦は白い腕章をつけなければならなかったし、この「きまり」は南仏に限らず、フランス東部のディジョンの町でも同様であり、更に、東部ブザンソンの町では肩に赤い札をつけなければならなかった。

服の色は、というと、売春婦は黄色に染めた衣裳を着けなければならなかった。古代の遊女たちはよく黄色の生地を用いて自分たちを他の一般女性と区別して格別に引き立たせていた習慣が、中世に入り中世が終るころまで引きつがれて、この黄色の服が彼女等の身分の表象となったのである。中世を通じて、黄色という色は不名誉の服色とされ、イタリアのヴェネツィアなどの都市でも売春婦は黄色の衣裳をつけた。鮮やかであった。――不名誉と言えば、丈の短い衣裳も古代から不名誉のしるしとされていた。短い衣裳をつけ白い素脚をちらつかせるのは売春婦の特権でもあり武器でもあった。――だから、売春婦は、短かいマントを

着ける女であり、或いは、頭巾つきのマントを着る女でもあった。

*

売春婦（娼婦）が白いふくらはぎや太腿をちらつかせていたのに対し、一般女性はもちろんのこと、高貴な婦人も、長い裳裾をつけて、素足さえ見せなかった。貴婦人の長い裳裾は荘重に床を掃くように引きずられていた。下半身は下着や派手なパンタロンでしめつけられていて堅固そのものの感じなのに、上半身は、というと、下半身とは正反対に、豊かな乳房の丸味を思い切りよく露わにしていて、そこから優艶な魅力を発散させていた。――英語で魅力のことを charm（チャーム）とか glamour（グラマー）とか言う。辞典を引くと、この二つの単語は、どちらも、「魔女が魔力を蜘蛛の糸のように放射して男性をとりこにしてガンジガラメにしてしまう、その魔力、魔術のこと」と定義されている。――何となくテレ臭く「魅力」だ、などと言っているが、実を言えば、女の魔力なのである。もっとも、よく日本語の「魅力」という訳語を見ても、「魅」という「鬼へん」の文字も、英語と同義だったことを発見する。

*

十四世紀末から十五世紀に入るころになると、貴族や富裕階級の女性たちの服装は、堂々とこの「魅力」を誇示するようになる。胸の部分の切り込みは最も深く大きく切りこまれ、「フランスでもスペインでも、宮廷では、女性の服装は、大抵、前も後ろもほとんど帯のところまで裸にされ、そのために乳房だけでなく上半身の大部分がゴソッとまる出しになった」とさえ言われた。当時の宮廷詩人クレマン・マロ Clement Marat は、その小詩『バルブとジャケット』の中で、

〃服は、白く光る腹だけを包んだ〃

……

と歎いた。「裸の女性は、紫の衣をまとった女性よりも数段と美しい」という、ルネッサンス気運の考え方が強く宮廷女性に信じられていたからであろう。

十五世紀初頭と推定されるある年代記には、

「……そして女たちは、大きな胸の窓（「襟ぐり」のこと）をつけたから、乳房のほうは、ほとんど半分が丸出しになった」

と記されている。――胸開きの大きな上衣を着けた上に、更にコルセットで胸を上へ上へと、締め上げるものだから、ちょっと動いても丸い乳房は上衣から転がり出すのであった。

十五世紀、フランスの諷刺詩の中に、次のような数行がある。――

〃乳房を丸出しにし、お尻を肌にピッタリくつつけた服で自分を見せる女は、

自分の性器がまぐさを欲しがっていると、男性全部に広告しているようなものだ！〃

*

当時の貴族の道徳法典では、貴族の妻は、公式の場には胸まる出しの服装で臨むこと、と命令されていた。

そんなに露出的なのに、この露出を、職人などの一般の女性が真似をすると、これは「風俗を乱す」不道徳な服装だ、と強く非難され、きびしい服装規定によって堅く禁ぜられた。――大きな胸開きと乳房露出は、貴族や上流階級の女性の特権であった。

羊毛の文化について服装の歴史を調べているのに、女性の上半身となると、布地がなくなって、どこかへ消えてしまうのだ。西欧では、どこの国でも同じ現象である。

第三章　十五世紀・女性の服装

フーケの『聖母子』

シャルル七世につづいてルイ十一世の宮廷画家だったジャン・フーケ(Jean Fouquet)が一四五〇年ごろ描いた『聖母子』という油絵（アントワープの王立美術館蔵）は、西洋美術史の上で、フランスの油絵として取り上げられる最初の作品の一つである。——中世風の、四角に模様を刻んだ中に貴石を鏤ばめた背板のある椅子に軽くスラリと腰をかけた聖母マリアは、その細い胴長の上半身を紫の衣で肌に定着するように被い、豊かな胸を包んでいた胸衣の紐ははちきれてほどけて、彼女の両肩と左の乳房をまるまるとあらわにしている。胸衣の下からわずかに縁どってのぞく肌着は薄くしなやかで、その上に、本当のまんまるの球体として、象牙のような艶やかな乳房が突びだしている。恥かしげに俯目の顔は、みがき上げられた象牙細工か、日本の雛人形の頭のように、滑らかで陰がない。十五世紀前半、貴婦人の間に流行した額を広く剃り上げる化粧の風習に従って、この聖母の額も異常に広くなめらかになっている。うすい眉、すじの通った鼻梁、小さな紅の唇、そして卵型の顔の形、細く長い頸、頸から肩、肩から左右にひろげた細くしなやかな両腕に至る曲線は、静かで清らかである。しかし聖母の左膝の上には、ヘンに大人びた幼児キリストが裸のまま載っていて、わきの下を聖母の左手で支えられている。斜め左上からの黄金の光の中に、真珠のような貴石をちりばめている王冠を戴いた聖母マリアの顔と、細っそりした肩と球体の乳房と幼児キリストとが、輝いて浮き出している。椅子の左右や奥は神秘的な赤い色彩の暗さに抑えられていて、その赤い暗光の中に、幼児の姿をした天使が、赤い色で左右に三人づつ、青い色で、一人と二人配置されている。その天使たちも象牙細工のように滑らかな仕上げの肌合いで描きこまれているのだ。

真赤な背景の前に白く輝いて浮き出ている聖母の顔と胸——極めて単純化された色彩構成と簡潔な造形の美しさは、見る者の魂を奪わずにはいられない。——天上の静けさと荘厳さを表わしていながら、また同時に、何と目の眩むような、まろやかな乳房の露出であろう。——それ自身を見れば、極めて次元の高い強烈なエロティシズムの表現なのだが、幼児イエスに与える聖母の乳房の愛情、ということで、これは逆に、崇高な聖母崇拝の焦点となって、厳粛な信仰心をそそるものとなっていたのである。

＊

しかし、これほど堂々と球体の乳房をマルマルと露出してしまった聖母子像は、西洋美術の中でも珍らしい。——その丸やかさは、乳房の下からきゅっと締って腰部に至る紫の衣の質感と見事な表現があればこそ尚更、対比的に輝くばかりにいとおしく強調されるのである。——この場合、イタリアに始まったルネッサン美術の中の聖母マリアが常に真赤

な下衣と青紫の上袍（うちかけ）をまとって描き出されているのに対して、フランス、トゥールに生まれたロワール派の画家ジャン・フーケは、聖母マリアに緋紫の衣を着けさせているのが特長的である。――王者しか身に着けなかった緋色（又は紫色）の、あの「テュロスの紫」の衣である。――他の肖像画の中の貴人たちが、とかくピカピカの絹やビロードの服で立ちあらわれているのに対して、このフーケの聖母マリアは、しっとりと落着いた質感の服地で身を包んで描かれている。――羊毛布地のもつ優雅な質感であろう。

一四五〇年といえば、ジャンヌ・ダルクが処刑されてから三〇年後のことである。当時のフランス王は、始めは臆病であったのに晩年には賢明な王となったシャルル七世（治世一四二二年―一四六一年）であり、長い百年戦争を終えて衰えた国力を増強しつつあった頃の国王である。シャルル七世は、スコットランドのマーガレット王女を妃としたが、アラン・シャルティエによれば、この王妃は「つれなき美人」だったという。国王は、トゥレーヌの郷士の娘で孤児となったアニェス・ソレルがロレーヌ公爵夫人に育てられて優雅な美女になったとき、このAgnes Sorel アニエス・ソレルを自分の愛妾とした。血色のよい美女で、栗色の髪の毛が美しく、笑い声も明るかった、という。――シャルル七世は彼女を溺愛したらしい。

当時のルネッサンスの風俗として、貴婦人たちは、競って自分の輝く裸身を、有名な芸術家の前にさらして、之をカンバスの上に「ヴィナス」や「処女マリア」として描かせた。アニェス・ソレルもその白蠟のように滑らかな素肌や丸やかな乳房や見事に均衡のとれた姿態を、イタリア留学を終えて宮廷画家となったジャン・フーケの前にあらわにして、その姿を何と「聖母マリア」として描き出させたのだった。――フーケの聖母マリアが輝くエロティシズムをもっているのは、そのせいでもあろう。

このアニェス・ソレルのことを後年フランソワ一世（治世一五一五年―四七年）は、「美貌の貴婦人」と絶讃し、「どんな修道女よりも気高くひたすらフランスのためにつくした女性だった」と評価している。そして「彼女の口びるから語られる言葉で、シャルル七世は自分の英知を新たにした」といわれている。――そんな気品と英知が、このフーケの聖「母子像」にはにじみ出しているように私には思えるのである。

フランスに特長的な上半身露出

フーケの描いた「聖母子」像の中の聖母マリアのゴシック式ドレスは、十五世紀半ば、寵妾アニェス・ソレルが愛用したローネックのドレスをそのまま写し出したものと云われている。――彼女の服が有名だったので、貴婦人たちは彼女の真似をして、ローネックや大きな胸開きを流行させていった。大きな胸開きのことを当時は「扇形の窓」ともいった。――庶民の女たちは、ホームスパンの麻や粗い羊毛を材質とした素朴な上衣をつけ、下に白いシュミーズ chemise を着け、そのシュミーズの上部を頸のところでギャザーさせた。シュミーズを上から押える胸衣を bodice（ボディス）という。十五、六世紀ごろにフランスの農婦を描いた銅版画を見ると、こんなシュミーズの上にボディスをぴったりつけ長い袖に裾が大きくひろがったスカートを着けていて、ほとんど素肌の露

出は見当らない。胸あき、胸の露出、「扇形の窓」は庶民にはきびしく禁じられていたからである。――それに反して、貴婦人たちは、会話をするとき、また特にダンスをするときには、「扇形の窓」のついた上衣の舞踏会服であらわれて美しい乳房のもり上りを見せびらかすのを許されたし、又、そういう風に作るように王室から命ぜられていたのである。――また上衣に「扇形の窓」をあけるのが上品だ、ともされていたのである。

*

現在の日本国内では欧米風の服装はすつかり同化してしまって、テレビで見る歌手やタレントを始めとして盛り場を歩いている女性たちの、胸開きの大きな、又は両肩あらわな服装に対しては、我々は少しもおどろかなくなってしまっているが、今から四十年や五十年も前には、ヨーロッパの貴婦人たちの装いは、我々日本人の眼には目新らしくドキリとする露出度であった。――一日ちょっとで飛んでゆける飛行機などは勿論なく、船足の早い豪華客船に乗って行っても、横浜からマルセイユに着くまでは最低三週間もかかった。――費用も大変だったし、滅多に日本人は欧洲にもアメリカ大陸にも出かけなかった。だから、欧米から帰朝（日本に帰国すること）した人は、「アチラ帰り」、「新帰朝の人」、ということで、大変珍らしがられたものであった。

その、戦前の珍らしい時期に、貴族階級のサロンやディナーパーティに出席する貴婦人たちの、両肩あらわに、乳房の丸味は大きく盛り上ってわずかに乳頭だけを陰（かく）しているローネツクのドレスである上に、背中のなめらかな肌は骨盤（こつ）あたりまで大きくあらわになっている装いを目のあたりにして、私は強烈なエロティシズムを覚えた。と同時に、王室に近くなるほど上流社会の女性たちの服装は、まる裸に近くなっていくものだ、という奇異感と好奇心をそそられたものであった。――やがてこれが、ヨーロッパの女性の服装の歴史的な「きまり」なのだな、と知るようになった。――フランス五〇〇年の露出の歴史である。

といって、一五世紀のフランスは、他の諸国に先駆（さきが）けて、服飾文化で先端を切り拓（ひら）いていたのではない。フランスという国は、まだ文化国家としての統一的な意識の下にまとまってはいなかった。イギリスやイタリアが、文明としては当時の先進国であった。――だから、十五世紀のころのフランス人固有の服飾を調べようにも、史料はほとんど見当らない。フランスという国が華やかに花ひらいたのは、やはり、ヴェルサイユ宮殿に華麗に君臨した太陽王ルイ十四世の時代になってからである。十七世紀の半ば以後から十八世紀にかけてのことである。

でも、明るくのどかな風土や大らかな国民性の為か、フランスの人たちは、五〇〇年の昔から貴婦人に限って、上半身の大胆な露出を気楽に受け入れた。胸から下が豪華な衣装で包まれていれば、上半身はあらわでよかったのである。――上半身だけならまだよかったが、国王の行幸をたたえるとなると、全裸に近い乙女たちが出迎えたのだから愉快になる。

一四六一年、シャルル七世の跡（あと）をついで国王となったルイ十四世がパリ市を訪問したときには、ボンコーの噴水の傍らには人魚に扮した全裸の三人の娘が坐っていて、すばらしい乳房と全身をあらわにしたまま、一人一人、国王の前で王をたたえる詩を朗読した、という。それは

「すばらしい見ものだった」ようである。

一四六八年、ブルゴーニュ国の豪勇シャルル公がリル市を訪問した際にも、香料を薫じた紗のヴェイルだけをまとまった裸の三人の美女が国王の前で美女コンクールを行なって公を歓迎した、という。その紗のヴェイルのキモノは、金髪の美女たちが誇る全身の曲線の柔らかさをすべて丸見えにしていたため、このキモノは当時「ガラスのキモノ」と呼ばれた。

*

国王クラスの最上級の社会の話なのではあるが、羊毛生産加工の国イギリスとちがって、フランス十五世紀の国内は、パリ・ファッションの先駆の芽生えとして、大胆な露出と華麗な消費にしか人々の目が向いていなかったことを、残された史料で知らされるばかりである。

第四章　十六世紀・フランス人の服装

「われらの羊にもどろう」

貴婦人たちの露出の衣裳の話がつづいた。

閑話休題。――本来の羊毛の話にもどろう。……ところで、ヨーロッパで「閑話休題」(もとの話題にもどろう)というというときには、大抵フランス語で「ルヴノン・ア・ノ・ムートン」'Revenons a nos moutons'と云っている。直訳すれば「われわれの羊にもどろう」である。――この熟語は、十五世紀フランスの笑劇『パトラン先生』"Maitre Pathelin"の中で主役パトラン先生が云った「せりふ」に由来している、といわれている。

中世末期のフランスでは、町民階級が力を得て来て社会的に活気を呈しはじめ、その町人社会の生活を反映する喜劇が盛んに上演された。中でも笑劇(ファルス)は、従来の喜劇の型としての寓話や教化的な意図を捨てて、社会生活に対する鋭い考察を、写実的に、そして時にはよく粗野と思われるほどに打ち出して、強く一般の人々に受け入れられた。その笑劇(ファルス)の中でも、韻文笑劇『パトラン先生の笑劇』という作品は、笑劇の中でも最高の傑作と評価されている。この作品が作られ上演された年代は、ルイ十一世の時代、一四六四年の冬だと推定されている。

パトラン先生は、一向に売れない弁護士で、依頼に来るお客さんはほとんど居ない。ある時、お人好しの毛織物商から、立派な羊毛の布地を買う約束で受け取り、今晩、代金を払おう、と約束する。パトラン先生は、この布地をごまかして手に入れよう、というズル賢い魂胆である。――それとは知らぬお人好しの毛織物商人は、その夜、パトラン先生の家に代金を取りに行くと、パトラン先生は仮病をつかって出てこないで先生の細君に、うまいことを云って追いかえされてしまう。……欺されてしまったのである。

このお人好しの毛織物商人は、自分が持っていた羊を、ある羊飼いの男(名前はチボーラ・ラニュレ)に預けておいたところ、この羊飼いの男チボーラは、なんと、預かった羊を、みんな殺して食べてしまったのである。

ついに怒った毛織物商人は、この羊飼い男を訴えた。裁判の日が来

た。――法廷に出て見て、毛織物商人は驚いた。訴えた相手の羊飼い男の弁護士は、なんと、毛織物を詐取したニックキ仇、パトラン先生その人だったのである。羊飼い男も憎い、その羊飼い男の弁護をするパトラン先生も憎い！――毛織物商人は怒る。頭にきた法廷での問答は、何が何だか、全く意味をなさないものになってくる。もうメチヤメチヤである。裁判長は、何度も机をドンドンと叩いて、

「われわれの羊にもどろう！」

と注意を与えるが、毛織物商人はただ訳もなくわめくばかり。羊飼い男のほうは、とぼけて、ただ、メェ～メェ～、と羊の啼き声を真似するだけで、ついに事件はウヤムヤのままに終ってしまう。

すると、パトラン先生は、依頼人の羊飼い男に「弁護料を支払え！」と迫ってゆくが、羊飼い男は、先生から授かった悪知恵通りに、法廷のつづきで、ただ、メェーメェー、と啼きつづけて、とうとう、ごまかしてしまった。

羊と羊飼いと羊の肉と羊の毛織物と毛織物商人とが四つ五つとからまった珍らしいウール騒動である。フランス語で「羊」のことを mouton（ムートン）というが、mouton という語は、同時に「羊の肉」のことも、そして更には「羊の皮」のことにも使われている。――英語では、羊の肉は mutton（マトン）といって、羊それ自身（sheep）と区別しているのにくらべると、フランス語のほうが大ざっぱである。――中世末期、十五世紀ごろまでは、フランスでは、羊は、肉であり毛皮でもあって、「羊の毛」ではなかった。羊毛を産業の中心として育っていった英国とはちがって、どこか大らかで無頓着で、しかも消費的である。

露出的な上流と質素な庶民

十六世紀初頭、フランスでは国力が充実しはじめていた。フィレンツェに始まり、ローマやヴェネツィアで花ひらいたイタリアのルネッサンス気運に遅れをとっていたフランスは、イタリア諸都市の軍備的弱さにつけこんで、四度もイタリア諸地方に攻め入り、新らしい騎馬隊や砲術で、イタリアをおびやかした。一五一五年から一五四七年のあいだ王位に就いていたフランソワ一世は、壮大な気宇をはらんだ武人であると同時に、芸術に熱中し学問に強い関心をもつ文芸擁護者であり、隣国スペインの王カルロス五世と西欧の覇権を競ったルネッサンス的な人間であった。――フランソワ一世は、動乱のローマの地から、安住の地を求めるレオナルド・ダ・ヴィンチを自国に招いて、フォンテーヌブローの居城近くの館に、この巨匠を無償で住わせ、二人の友情をあたためながら、レオナルドの死の床にも立ち会った。フランソワ一世の強い要請で、『ラ・ジョコンダ像』（通称「モナリザ」）の板絵がフランス国に売り渡されたのも当然のことであろう。

フォンテーヌブローの城には、多くのイタリアの画家たちを招いて、王はフランス絵画初期の開花をうながした。このフランソワ一世の武人でありながら文芸擁護の知性人でもある容貌を、ブルゴーニュ公に仕えたフランドルの画家ジャン・クルーエ Jean Clouet は、宮廷画家となってから、一五二四年ごろ、実に鋭く生々（なまなま）しい写実の中に優雅な細緻さを以て、見事な肖像画として浮き彫りにした。高さ一メートル足らずの板に描かれたこの油絵は、いまルーブル美術館にある。

乳房を入れて、外見上の丸やかさを打ち出した。——ブラ・カップの始まりである。

当時つくられたフランスの詩には、まろやかな乳房をうたったものが数多く見受けられる。十六世紀前半の宮廷詩人 Clemant Marot クレマン・マロは、フランス最初の十四行詩（ソネット）の作者として文学史上に有名だが、その作品の中にも、輝く乳房の美しさを礼讃したものがいくつか見出される。意訳してみよう。

〝たまごよりも白い立派な乳房！
真新らしい繻子（しゅす）でできている乳房よ！
バラの花も顔負けの乳房！
何ものにも喩（たと）えようのない美しい乳房よ！

（一五三四年作）

＊

貴婦人たちの乳房は、ぴったり肌に密着した胴衣の上からはみ出して白く象牙のように輝いていた。——それに反して、一般庶民の女たちは胸部の露出をかたく禁じられていた。庶民の女たちの服は、質素な羊毛（ウール）の布地で出来ていた。

露出的な衣裳の女性の美しさとは対照的な、質素な布地で胸を被っていた女性の美しさを、クレマン・マロは、その小詩『バルブとジャケット』“De Barbe et de Jaquette”の後半で謳い上げる、——

〝かたい乳房と立派なからだを

艶やかな白の絹と、金糸の刺繍のある黒のビロードとをタテ縞の模様に仕立てた豪華な胴衣とふくらんだ袖、毛皮の帽子、鋭い眼光とキリリと結んだ口もとに漂（ただよ）う王者の気品は、写実のきびしさの中に優美な貴族趣味をにじみ出させている。——一五〇九年に作られたある詩では、このジャン・クルーエの名は、レオナルド・ダ・ヴィンチと並び称される絵画の巨匠だ、とうたわれていた。そのジャン・クルーエの、そしてフランス十六世紀の、数少ない絵画の一つが、この『フランソワ一世の肖像画』である。

このフランソワ一世の肖像画に見られるように、十六世紀フランスの上流階級の人々の衣裳は華美で豪奢だった。肩つけや袖のあたりをやたらにふくらませ、胴衣は腰のあたりでキュッと引きしめて、肌に密着したズボンは靴のところまで届くものだった。

貴婦人は、といえば、依然として前世紀と同じく、上半身は露出的だった。——衿ぐりは大きくあけてふくらんだ乳房の高まりを見せ、外衣（ガウン）はほとんど背椎の最下部で短かく切った。下衣は胸の下方、胸の下方、腰の上方あたりでキュッと細くしめつけ、袖は大きく波うたせ、大きな針金の輪をスカートの中と下辺の縁（ふち）に入れてスカートを大きく広げた。身分の高い女性は、このスカートの後方に、もう一つ長い裳裾（トレイン）をつけて床に引きずるようにした。身分の高い女性ほどその引きずる裳裾は長いものだった。——そんなに下半身を過大に被ったのに、上半身のほうは丸裸同然だったことは、前世紀と変りのない型（フォーマット）になってしまった。——天然の乳房が貧弱な場合には胸部が不恰好にひしゃげてしまうのを怖れて、コルセットの下に人工の

な毛織物の灰色の粗末な着物ですつぽり被った
ジャケットの姿を見ると、
私は、その美しさに打たれて、
こう言いたくなる——
〝あなたのその灰色の着物は、
永遠に燃える炎を隠す灰なのではないか？〟と。

＊

服装は階級差別のための表示であり規制であった。一五七六年、アンリ三世が布告した服装規定は「神聖な勅令」と云われた。その一項に、
「庶民のものが、貴族の服装を横領して、自分の女房を貴婦人に仕立てあげることを禁ず」
という意味あいのものがある。そして但し書きがついていて、「娼婦と絞刑吏の娘は、この規定から外れる」とあった。——つまり、庶民であって、その女性が貴婦人の服装の真似をすれば、それは、娼婦か、社会の埒外の人（非人）と間違われるぞ！——というおどしの警告であった。こういうことは何もフランス一国に限らず、ヨーロッパ諸国全体の規制であった。例えば、ベネツィア市会が十七世紀に布告した法令にも「公娼以外の者は何人であれ、胸を露わにして外出したり教会に礼拝に行ったりすることは許されない！」と、きびしい。貴族社会に属する女性は当然のことながら、この法的制約からは外されていた。各地でたびたび発令されている服装規制の法令を見ていると、如何に一般庶民が、貴婦人のあらわな上半身の胸開き服にあこがれて絶えずその禁令を無視して貴婦人の真似をしていたかが推察できて面白い。

第五章　十六世紀後半、フランスの衰退

「パニュルジュの羊」——附和雷同

十六世紀フランスの上流貴族婦人たちは、胸開きの大きい胴衣を着けて、その大きな扇形の窓の上に真白い乳房の上半部の丸味を輝やかせていた。——そんな大きな露出は貴族婦人だけに限られていた。服装規制の法令が度々施行されて階級を差別する規制となっていたのだが、それでも一般庶民の女性はそういう禁令を破って上流貴婦人のあとを追って胸あきの服装を模倣した。——一人がやれば次ぎの人、と真似をしてゆく。流行は枯野の野火のように忽ち激しい勢いで広がってゆく。つまり「附和雷同」である。——意味も判らずに、誰れかが何かをすると直ぐそれに同調して、くっついて行ったり騒いだりすることを、漢文で「附和雷同」というのだが、この「附和雷同」にあたるフランス語の熟語は「レ・ムートン・ド・パニュルジュ」、'Le mouton de Panurge' という。「パニュルジュの羊」という意味であるが、この成句は、フランス十六世紀前半の偉大な作家フランソワ・ラブレー Francois Rablais (1404？—1553) の大作『パンタグリュエル物語』（一五四六年刊）第三之書の中にある一挿話に基いている。

パニュルジュとは、笑いと諷刺の巨人王パンタグリュエルの一の子分の名である。悪賢く機智縦横の才をもつ、少し下品でダジャレの名人であり、『パンタグリュエル物語』では狂言まわしの役で活躍している。

＊

このパニュルジュ氏は、ある時のんびりと船旅を楽しんでいた。ところが、風采のあがらないパニュルジュ氏を見て、相乗り客の一人の商人が、ひどい悪口を云ってパニュルジュ氏を侮辱した。自信家のパニュルジュ氏はこの侮辱に対して激しく怒りを感じて、その商人ダンドノー Dandenault に復讐してやろう、と心に決める。

商人ダンドノーは、羊を数十頭もこの船に積みこんでいた。目的地に着いたら、この羊を全部売りさばこうとしていたのである。

パニュルジュ氏は、羊の商人ダンドノーに掛け合って、羊の中でいちばん大きな牡羊を買おう、と申し出たが、ダンドノーは掛け引きをして仲々申し出の金額には応じないで値段をせり上げてゆく。それでもパニュルジュ氏は、その高額の提示を承知して、大金を惜しまずに彼に投げ出し、見事な牡羊を一頭、買い入れたのだった。――パニュルジュ氏はこの牡羊は、数十頭の羊の群れの中の親分格のリーダーだ、と見抜いていたのであった。

牡羊を買い入れた途端、パニュルジュ氏は、その牡羊が啼き叫ぶのも構わずに、その牡羊をいきなり船の上から広い海の中へ放りこんでしまったのである。――羊の性情として、彼等はいつも群れをなしてリーダー格の羊の行く通りにそのあとについて盲従して行くものなのである。リーダーの牡羊が海中に飛びこんだため、船の上にいた数十頭の羊たちは、リーダーの羊のやった通りに次ぎ次ぎと海の中に飛びこんでいった。貪欲なダンドノーは大事な商品がすべて海の中に消えてゆくのを見てオロオロと羊を引き留めようとはするが、羊群の暴走は止められなかった。最後に海の中に跳び込みそうになっている羊の尻尾をしつかと捉まえたが、その羊を海中にとび込んでしまう。尻尾を離そうともしないダンドノーはついに海中に消えてしまった。――パニュルジュ氏の復讐は成功した。

羊の群れのように、意味も判らずに附和雷同する群衆のことを「パニュルジュの羊」というのは、このパニュルジュ氏の挿話に由来するものであった。

露出の素肌と入浴

十六世紀前半、特に上流階級の女性たちは、肩から胸、腕から手へかけてその素肌をあらわにし、その輝きに磨きをかけるのが流行であったが、その当時刊行された『若い女性のための案内書』という本を見ると、ほとんどの女性が、

「肩とか腕とか手とかの、他人の目にさらされていて見える部分以外のところは清潔にしようとする気は全くなくて、例えばシャツの下の素肌は汚れたままで通している」

と記されている。それは一般の風潮というよりも思いこみに近い信念でもあったようである。何故ならば、

「顔や手以外の部分まで洗うのは売春婦だけだ」

という格言まであったのだから。女性に限らず、宮殿もパリの都も外見（見かけ）は立派だったが、中味は決して清潔ではなかった。十七世紀前半まで、パリの都の内側は不潔だったようである。

一六二三年にパリを訪問した一人のイギリス人の報告が残っている。それによると、もうヨーロッパ最大の都市の一つとなっていたパリの都

のだが、

「セーヌのほとりのパリの都に来て見たら、外見はいかにも立派だが、お世辞にも清潔とはいえません。――これがヨーロッパ最大の都パリ！何とも奇妙なこと、どなたでもこの都の街路をお歩きになると、どこででもあの香んばしい匂いが鼻をつくのです！」

＊

女性の露出はエスカレートしてゆく。女性はよりよく見られること、より多く見られることを望み、その見られる機会、見られる部分は拡大してゆく。

真摯な哲学者モンテーニュ（一五三三―一五九二年）は、誇張なしに当時の上流婦人たちを観察して次のように述べている。――

「わが貴婦人たちは、たしかに上品でお美しいが、なんと、お臍がのぞくまほど胸の部分を大きく露出している姿に、たびたびお目にかかるのです」と。

＊

フランス宮廷における貴婦人たちの肖像画がいくつか残っているが、例えば、マリー・ド・ロアン公夫人の肖像画などでは、片方の乳房をまろまろと露わに出した服装で堂々と描かれているのだ。これは、第三章で触れたシャルル七世の寵妾アニェス・ソレルが、その艶やかな乳房をあらわに「聖母子」像として描かせ、更には他にも同じポーズの肖像画をも描かせていたように、それが一つの伝統的な流行となって貴婦人の間に拡がって行ったものであろう。

露わになる素肌の部分が大きくなって行くにつれて、その肌を清潔にしようという気風も進んで行き、清潔にする肌の部分も拡がっていって、とうとう、入浴という風習が生まれて行く。上流階級だけの話だが、彼女等彼等は、事あるごとに入浴をし、家庭の中で入浴の設備をして、出来れば香水風呂に入ることが、彼等上流社会のエチケットの大切な条件の一つとなっていった。街にいくつもあった公衆浴場は減って行ったようである。

――日本人の我々から考えると、仲々想像できないことなのだが、現在のフランス人でも、ほとんど風呂には入らない。毎日入浴する人はよほどの上流階級の人である。普通の家庭では、部屋の隅に据えつけた水槽のバスタブに、一週間に一遍はいる位である。余り入浴しない。――その代り、体臭を消すために香水やオーデコロンを多用した。フランスの香水が世界的になったのも、この入浴習慣に基く、ということは、読者衆知のことであろう。

荒廃の国土を再建するアンリ四世

一五五〇年ごろ、それまで代々のフランス王が狩猟に情熱を傾けていたのと同様に、国王アンリ二世（一五四七―一五五九年）も狩猟に情熱を燃やし、寵妾ディアヌ・ド・ポワティエ Diane de Boitier のスラリとした美しい裸身を、その名 Diane にあやかって、ギリシヤ・ローマ神話の狩猟の処女神 "Diana"（ダイアナ）として描かせた。ルーヴル美術館に所蔵されている『ダイアナ』の油絵は、フォンテンブローの城に招かれたイタリアやフランスの画家たちのグループ「フォンテンブロー派」の中の一人の筆になるもの、といわれている。――青い眼で金

髪の長身の美女ディアヌ・ド・ポワティエは、女神としての気品と優雅さと神話的な神秘感とを表わしていて美しい。――この裸身は、おそらく香水風呂のあと、十分に磨き上げられた香ぐわしい素肌であったことだろう。

このアンリ二世の没後あたりから、フランス国内は、通称「ユグノー戦争」といわれる新旧二派の宗派争いによる宗教戦争にまきこまれて、この内乱は三十年に及び、国土は荒廃してゆき、無政府状態のまま放置された。

一五八九年八月二日、アンリー三世は暗殺されて、十四世紀以来のヴァロア朝は終りを告げ、活気と威厳と知性をもったアンリ四世が三十五才で王位につく。王は「王国を持たない王」として国内の平和と秩序の再建をはからなければならなかった。

田畑は荒れ果て、交通は途絶え、生産は振わず、野盗は横行していた。ある地方の記録に、

「やせ衰えた村人たちは、シャツも靴もなく、生きた人間というよりもまるで墓場から出て来たようだ」とある。

＊

フランスはカトリック教国の北フランスと新教国の南フランスとに分裂しかけていた上に、それが更に多くの小さな国に分裂しようとしていて、このままではフランスという国はスペインの支配下に入ってしまう、という恐れも強かった。

「神が予をこの王冠に招き給うたとき、フランスは半ば荒廃に帰していた……」

とアンリ四世は自ら述懐して書き残している。アンリ四世は国土再建へ猛然と取り組む。王は、マクシミリアン・ド・ベテューヌ、通称「シュリー公」（一五六〇―一六四一年）を登用して、まずフランス国の経済的再建を行なわせた。シュリー公の有名な言葉――

「耕作と牧畜とはフランスを養う二つの乳房である」。

シュリー公は特に農牧を保護育成し、土木事業を盛んにし、貿易や植民を奨励した。そのため商工業は発達し、織物業やコブラン織が急速に進展して行った。フランスは、このアンリ四世という英雄によって、めざましい復興の道を進み、国力を充実して行ったのである。

このアンリ四世、実は大変な好色家でもあったようだが、また典型的な勇者でもあった。しかし、生まれてこのかた、ほとんど入浴ということをしなかったらしい。王は友人に「王は死体のような匂いがする」と直言された。豪奢な服を着ていても、肌の清潔という点では、当時のパリの都の裏側と同じであった。

しかし、表向きには、フランスの国や王室は、十七世紀に入ってゆくに従って、いかにもフランス的な優雅さを帯びながら、ルイ王朝の華麗さへと花ひらいてゆくのである。

第六章　十七世紀・表向きの華麗さ

皇太后マリー・ド・メディシス

「耕作と牧畜とはフランスを養う二つの乳房である」という名言で知られるシュリー公の力もあって、フランスの国は序々に国力を充実して

いった。国王アンリ四世は、勇敢に国土再建に取り組み、

「日曜ごとにすべての農家の鍋の中に雛鳥を！」

と宣言して国民から敬愛された。

一六一〇年五月十日、王はカトリック教会を破壊しようとしている、と盲信した一人の狂信者によって、この愛すべき王アンリ四世は暗殺された。四十七歳であった――国内は騒然としていた。次の王は嗣子ルイ十三世だが、時に年令まだ九歳に満たない。アンリ四世の后マリー・ド・メディシスが、息子の王の摂政として国務を掌どって行くことになるのだが、彼女はわがままで思慮浅く、その上、独占欲が強く権力にも貪欲であった。また、お世辞を使うことだけ上手な無能の連中を寵愛して彼等の意見に左右されることが多く、やがて、生れつき思慮深い息子のルイ十三世から嫌われるようになるのである。

この皇太后マリー・ド・メディシスは、イタリア・ルネッサンスの気運を作り出したフィレンツェの名門メディチ家の出身なのだが、「何等の才能もなく、毎朝、ゆっくりと床を離れると、お化粧や身のまわりを飾ることで一日を過ごす」という、虚栄心と自己顕示欲の強い女であったようである。

イタリアから海路を経てマルセイユに上陸してパリの王宮に婚いで来たのが一六〇〇年。その翌年に生れた息子の洗礼式のときには、なんと三〇〇〇個のダイヤと三二〇〇〇個の宝石をちりばめた外袍（ローブ）を身につけて、居並ぶ貴紳たちを圧倒した。そんな皇后の影響から、宮廷にいる廷臣たちは、それぞれ異ったスタイルの服を二十五着は持っていないと、自分たちは貧乏人なんだ、と思いこむようになった、という。

マリー・ド・メディシス皇太后は、自分の権勢を顕示するために一六二一年、パリに豪華な新宮殿（リュクサンブール宮）を建設し、その宮殿内の装飾を、当時、世界的に巨大な芸術家としての名声の高かったペーター・パウル・ルーベンス（1577―1640）に依頼した。一六二二年、フランドルからパリに来た巨匠ルーベンスは、外交官も兼ねていたこともあって、フランス宮廷の申し入れをよろこんで迎い入れ、皇太后のお気に召すような、膨大な絵二十一枚を三年かかって描き上げた。現在、パリのルーブル美術館内の「ルーベンスの間」に飾られてあるあの有名な大作である。それぞれタテ四メートル、ヨコ三メートルもある巨大な油絵の連作は「マリー・ド・メディシス一代記」と名付けられている。――皇太后の誕生日から、婚礼、マルセイユ上陸、王子誕生、戴冠式、アンリ四世の死、摂政……と、あまり目立った業績のない皇太后の一生を、寓意や古典神話をからませて、まことに豪壮華麗に描き上げられている。

たしかに、各連作には、ギリシヤ・ローマの神話の神々やニンフェたちを数多く登場させて画面を溢れる色感でみなぎらせてはいるが、肖像画としての皇太后やその侍女廷臣たちの衣裳や容貌などはルーベンス自身の鋭い写実の筆で正確に写し出されている、と考えてよかろう。――例えば、この連作の中でも特に傑出している、と美術史学上、高く評価されている「マリーのマルセイユ到着」の絵を見ると、彼女は長身を少し反り身になって、胸開きの大きな、銀色に輝く裾長の服を着けて、腰のあたりを極めて細くしめつけて立っている。頸のまわりには白いヒダ

のレースの襟が立っていて、彼女の金髪を引き立てている。この服地は一体何なのだろう。その上、何条にも金糸で縁どられた上には、無数の宝石が輝いて目眩めくようである。――戴冠式にのぞむ時の皇太后の服や外袍は、レースと宝石と白い毛皮に縁どられて、豪華絢爛という外、形容の仕方がない程である。「フランスには世界の花が秘められている」とパリの王立図書館のピェール・デュプイにあてて、巨匠ルーベンスは手紙を書いている。そんな華麗さを捉えようとルーベンスはこの巨大な連作の中に、フランスへの敬愛をこめて、宮廷生活の風俗をリアルに描きこんだのであろう。

ちょうど、そのころは、立派なからだ、上品な身のこなし、高尚な趣味、音曲舞踏に道じ会話を巧みに運び、理性的であると同時にこまやかな心情をもつ「サロン」的人間――紳士淑女（オンネトーオム・プレシューズ）が理想的人間像として形成され始めていたパリの都なのであった。――手づかみで肉をナイフで切って食べていた習慣から離れて、フォークを使って優雅に食事をすすめて行こう、という礼儀作法がいわれ出した時代なのである。

フランス農民の困窮

このように、武骨だったアンリ四世の時代とは違って、ルイ十三世（一六一〇―一六四三年）の時代には、前にもまして、贅沢で高価な材料を使って、色どりも輝やかしい衣服が用いられるようになり、毎日衣裳を取りかえることが身分の高い人の「しるし」となった。上流社会では香水が使われ始めて、「フランス式おしゃれ」が流行し始めたのである。

一六二四年、枢機卿リシュリューが、三十九歳で国王顧問官の長となった。宰相に当る位である。リシュリューはいった――

「私の第一の目標は国王の尊厳であり、第二の目標は王国の盛大であった」。

＊

リシュリューは商工業を保護し貿易を促進させ、たえず続く戦乱に備え、国力を増強するために、課税を強化して戦費を調達した。そのため、商人階級（ブルジョワジーという）は苦しんだが、最も苦しんだのは、都市の貧民と農民大衆であった。

王政の力強さを拡大しようと、国王ルイ十三世も農民たちに対しては苛酷であった。――「泣きわめかせないで、めんどりの羽をむしりとれ！」とはルイ十三世の云った言葉である。王宮の華麗豪奢とは全く対蹠的に、国土の大半は困窮と荒廃に被われ、農民たちは十分に食物も取れず、着るものも満足に手に入らずに、殺人などが平気で横行していた。ある記録には、

「農民たちは雑草で露命をつなぎ、死んだ動物の腐りかかった肉までも平気でむさぼり食っているし、道路という道路は息絶えた人で埋まっている……」

と記されている。

そんな悲惨さとはウラハラに、異臭に満ちていた泥んこのパリの都は急速に敷石が敷かれていって美しい都に変貌した。パリ人たちは、これを「世界の七不思議に次ぐ第八番目の不思議だ」と誇った。

＊

華やかなパリの都、そこに往き交う上流階級の淑女たちは、くじらの骨でコルセットを補強し、針金で落下傘スタイルのスカートの裾を大きく広げ、髪の毛は高くまとめ上げて優雅に装っていたし、紳士たちは、長く垂らした髪をカールして、羽毛で華やかに飾り立てた縁の広い帽子を被って、男性も女性もお互いに虚飾を競い合った。国王ルイ十三世は早くから頭が禿げ上ってしまったのを隠すために「かつら」を常用したが、この国王にあやかって、一般上流の男性の間に「かつら」をかぶることが流行した。——華美な装いは、十七世紀後半の太陽王ルイ十四世の治世に向かってエスカレートして行くし、歴史的な記録も、国内の戦乱とルイ十四世の華麗な世界の展開に目を奪われて、この繁栄を支える基幹産業の姿や由来についてはほとんど何も語ってはいない。——事実イングランドとちがって、交易の国、消費の国フランスには、これといった産業がなかったといえる。耕作と牧畜がフランスの国を支えたとしても、とても羊毛を多量に生産し加工して、それで国民全体の衣住生活をあたたかくしたとは思えない。あんなに素朴に、国土内のあちこちに羊の群れが放牧され、生活の中にとけこんでいた中世時代とちがって、特に、羊毛産業が最も盛んだったフランドルに近い北東部の国土を失ってしまった後では、フランスの人たちは、羊毛で自給自足する気力も失ってしまったようである。英国から輸入する羊毛加工品を購入して、それをただ着用し消耗させる——そんな状態がつづいたようである。産業の基本的な興隆は、十七世紀後半の為政者の力強い政治力を待たなければならなかった。

一般農民は、何百年前とほとんど変りなく、素朴な羊毛の厚手の服地を上着として着用し、ボロボロになるまで着古しつづけた。

＊

十七世紀の半ばごろまで活躍したフランス画派の画家は、ニコラ・プーサンとル・ロランとラ・トゥールとル・ナンの四人が代表的な芸術家だといわれるが、ニコラ・プーサンは古典主義の代表者といわれるよう、に、ギリシャローマ神話や歴史に題材をとったものしか描かなかったし、同じ古典的題材で描いたル・ロランも、主題は単なる借りもので、描き出されるものは、実は古典的な風景画であった。今世紀始めに発見され再評価されたラ・トゥールは、一本のろうそくの光の中に浮き出る聖者たちを極めて敬虔的に描きつづけているばかりである。

その中にあって、Louis LE NAIN ルイ・ル・ナン（1593—1648）は「農民の家族」「百姓の食事」等など、ほとんど、当時の農民の姿ばかりを克明に、誇張なく描きつづけていて、十七世紀前半のフランス農民の服装や生活様式を知る上でも貴重な史料の一つとなっているともいえよう。

野良の仕事を終えて食事をしたり集っていたりする農民たちの服装は現在の野良着（作業衣）と大差ない質素な毛織の厚手の服であり、染色もほとんど施されていない素材のかたまりであり、たまに、白い麻布があちこちに使われている位である。

「百姓の食事」風景といっても、それは粗末な食卓の上のパンとブドウ酒だけで、まことにつつましい雰囲気で進められている。それでも、個々の人物たちは、それなりに自足し、おだやかな表情で静かに食事を

進め、楽器を奏で、わずかな会話をたのしんでいる。――農民には農民なりの、諦めにも似た敬虔な自足の念があったのではないか、と思われる。虐げられた悲惨な印象はない。ベージュか、くすんだ褐色の服の中にあって、主婦の着ている服だけが赤で、それなりにはなやかである。

第七章　太陽王ルイ十四世の「大御代」

財務総監コルベールの手腕

いよいよ、太陽王ルイ十四世（一六四三―一七一五年）の大御代（グラン・シェクル）である。大浪費と贅を尽したヴェルサイユ宮殿に華麗な宴を夜毎展開した事制君主時代の幕開きである。

ルイ十四世という人は、読み書きも出来ない本当の無学の男で、およそ教養というものが大嫌いであったが、逆に「虚栄心」だけは大変なもので、その上フシギなことに「国王としての自分に威厳をつける術は、誰もが真似できないほど十分に弁えていた」といわれている。――「神は専制君主となって地上を歩き給う」と考え、又「専制君主は万物の中で最高のものさしなのだから、王は最高に高価な金襴緞子の衣裳で立ち現われるのだ」と信じていたし、廷臣たちもそう信じていた。

その君主の衣裳は黄金と宝石であった。衣裳に限らず、君主の寝台のカーテンも部屋のじゅうたんも、すべて金銀が織りこまれていたものだった。更に王は、自分の廷臣や下僕にも、青地に金銀の刺繍をした金ピカの制服（勅許服）をお仕着せとして着用させて、大陽王の威厳を顕示した。

＊

だが、更にフシギなことは、こんな阿呆な国王なのに、彼はすばらしくよく切れる補佐官を抱えていて、彼等に国政のすべてを任せていたことである。――ルイ十四世の顧問官は、ル・テリエ、リオンス、コルベールなどであったが、中でもコルベールは次第に頭角をあらわして実力を発揮し、のし上がってゆく――壮麗な建造物と美女とを愛して「夢の国のような饗宴」ばかりを催していた財務総監ニコラ・フーケ（一六一五―一六八〇年）が失脚した後、しばらくしてから、一六六五年に、コルベールはついに財務総監という最高の地位に就いた。彼は、財政、産業、軍事、殖民政策などに、聰明な頭脳と鋭い手腕を駆使して、国政を牛耳ってしまった。彼が財務総監の地位についたのは、彼が四十六歳のときである。――以来数十年、彼の力で、ルイ十四世の華麗な治世が花開くことになる。彼こそ、ルイ十四世の世紀を代表する最高の人材だ、といわれるのは過言ではない。

「ヨーロッパ諸国との富の戦争でフランスの優位を築くこと」というのが彼の目標であった。彼は国内生産を増強し、自給自足の体制を樹立する反面、国家として輸出のための花形産業を指定すると同時に輸入を制限し、国家の援助によって「特権マニュファクチュア（手工業）」を創設して、国力を充実させようとしたのである。

＊

コルベール（一六一九―一六八二年）は、実は、毛織物商人の息子であった。そんな一介の商人（ブルジョワジーという）から成り上がって遂には国政を掌握するという高い地位についたことは、従来のフランス

の政治の歴史の中には無かったことであった。だから、大貴族サン・シモン公爵は、この時代を「賤しいブルジョワジーどもが長く支配した治世」と慨歎した。――事実、コルベールをはじめとする多くの商人（ブルジョワジー）出身の者が国政に参劃したため、ルイ王朝は一般に「ブルジョワジーの治世」と云われているのである。

コルベールは成り上がりはしたが勤勉な男だった。勤勉な顔付きをしていて、粗末な服しか身に着けず、他人からは、カチカチの「北方人」とか「大理石の人」とあだ名されていたほどの堅物だった。――ルイ十四世の側近にこんな人がいた、とはフシギな組合せであり、国家にとっては、まことに幸せなことであった。――それは前の時代、アンリ二世には、「耕作と牧畜とはフランスを養う二つの乳房だ」といったシュリー公が国政の補佐役として付いており、次のルイ十三世には、「第二の目標は王国の盛大であった」といった枢機卿リシュリューが宰相として付いていたことと似ている。

*

国家の繁栄を願うコルベールが先ず考えたことは、従来おろそかにされていた国内の織物産業を真っ先に振興しよう、ということであった。――やはり、毛織物商の家に生まれたコルベールらしい発想である。

コルベールは、一六六九年「毛織物法典」を発令して、従来の古い織物業界の同業組合の能力だけではとても国外や海外に多量に売り続けて行くだけの生産量をあげることは期待できない、と考えて、諸外国から熟練した技師や職人をフランスの国に招いて、国家の監督の下に『ヴァン・ロベール王立毛織物会社』という特権会社を創設して最高級で精緻なウール製品をコンスタントに生産させるようにしたほか、更に『ゴブラン織り王立会社』を作るなどして、ゴブラン織りをはじめとして、絹織物やじゅうたんや麻製品やレースや靴下などの生産に力を入れたのである。

彼のこの思いつき（創案）と努力とによって、フランスという国はわずか数年のうちに、今まで一度も見られなかったほどの活気を呈して、これらの織物生産はめざましい発展をとげたのだ。ついで、製鉄やガラス工業や陶器製造などの新産業も興隆してきて、贅沢な陶器や香水や帽子や化粧品など、いかにも現在のフランスという国のお国柄らしい奢侈品の高級特産物が、この時代、コルベールの力によってフランス国独自のものとして確立され、他国の水準を抜いて、国内の力と富とは豊かになっていったのである。当時のヴェネツィア大使はいった――

「世界のどこにおいても最も優れて良い物は、今ではすべてフランスで作られている」

*

ポワローは『王に捧げる書』（一六六九年）の中で、この国民的解放を歌った、――

〃つたなき　わが国の工匠は
いまや　極めて巧みとなり
（中略）
その技の前に　わが隣人は
屈せり〃

毛織物商などの繁栄

コルベールは、これらのフランス特産品の輸出を奨励促進して国富の増大をはかる。富の戦争で海外の諸所を征覇して植民地を確保してゆく。製鉄業を盛んにして軍事力を増大したことが、その推進力にもなった。――例えば、アメリカ大陸に渡っては、ルイジアナ地方をフランス領として、その地には「ルイ王」の名を冠して「ルイジアナ」州と名付けたし、河を征圧しては、その河を、自分の名にあやかって「コルベール河」と命名した。現在のミシシッピー河のことである。

ルイ十四世いわく、

「領土を拡大することは、主権者にとって最も適わしく且つ気持のよい仕事である」と。

ネーデルランド戦争（一六六七―六八年）、オランダ戦争（一六七二―七八年）、ファルツ戦争（一六八八―九七年）、スペイン継承戦争（一七〇一―一三年）と、多分に侵略的な戦争をフランス国は続けてゆくのである。

＊

豪奢な織物などの輸出を促進するためには、織物（布類）の輸入を禁止することが先ず第一の得策と考えられる。従来、東インド会社は、インドなどの東方地域からインド更紗や染色した綿布やシナの金糸銀糸で織った絹の布（綾や錦）などを輸入していたが、織布生産に気勢をあげていたリヨンの市民は、これらの加工され仕上げられた布地――つまり「染色布」の輸入禁止を国に訴えていたのが、一六八八年に国で認められて以来、東インド会社は致命的な打撃を受ける。東インド会社もこれに対抗して、この通称「染色布事件」は、ルイ十六世の治世に至るまで争われたほどである。

＊

フランスの国力を充実させようと懸命なコルベールは、

「マニュファクチュア（手工業）だけが輸出によって貨幣ストックと国力とを増大させることができる」

と信じていた。都会人で商人の子である彼が、商工業を第一に考えるのは当然のことかも知れない。商工業に国策の重点を置くことを「重商主義」というが、日本語で正確にいうなら「重商工主義」と、工の字を入れて表現した方がいいのではないか、と私は考える。

コルベールは先ず工業を保護する。「訓練と財政的な懸念」から、彼は特権的工業に従事する人たちの組合を到るところに拡げようと努めた。――当時支配的だった特権的工業では、親方の下に職人と徒弟とがいて職人や徒弟は一定の年季を経過すると自分等も親方になれた。職人や徒弟は親方の家の屋根裏に寄宿していた。ある記録によると、例えば、一六八二年のパリの町には、親方一七〇八五人、職人三〇八〇〇人、徒弟一一〇〇〇人、がいた、という。手工業の生産は国家から特権として保護されていたが、その手工業者は、実はあまり裕かではなかった。彼等の家の中には、粗末なテーブルと椅子しかない、というような、まことに質素な生活であったようである。（もっとも、それでもまだ農牧民の生活よりはマシであった）。

次いでコルベールは商業をも保護する。商人はそれぞれ同業の組合を

作って繁栄する。中でも、毛織物(ウール)商を始めとする六つの大きな業界が作った組合は、当時大層有力なものであった。——毛織物商、食料品商、小間物商、毛皮商、編物商、金銀細工商の六つである。——商人たちは儲かってゆき、大商人から貴族にまでなる者が次々に出てくる。

重商工主義は国富を増大していったが、商工業に重点を置いた当然の帰結として、農業は商工業に従属させられる。コルベールはいう、

「農業は工業都市に安価なパンを供給するものなのだ」。

*

ここでいわれている農業とは、日本においては農地耕作しか意味しない、そんな狭義の農業に限定せず、もっと広く、牧畜をも含めた地方田園での生産活動を指しているのである。「農業」というよりも「農牧業」と呼んだほうが、フランスを含めた西欧の歴史や生活を見て行く上で正確に理解しやすい、と私は考える。

コルベールは、都会の商工業を充実発展させる、という目的の為だけに、農村と田園を利用した。農牧地は、とりあえず町に必要な物資だけを供給すればいいのだ。しかし、そこが疲弊してしまっては元も子もないから、コルベールはそれだけのために、農牧民を厳しい徴税から少しだけ保護した。

——例えば、「農耕の道具や家畜は差押えてはならない」などという法令を出し、又、強盗の横行を抑えたり、小麦生産のためにブドウ畑の作付替えを奨励したり、大麻や亜麻などの工業用作物の耕作を推し進めたりした。

参照。Hubert Methivier : "LOUIS XIV" (QUE SAIS—JE) など

しかし、やはり農村や田園は、商工業(マニュファクチュア)のための従属的な補給ルートにすぎなかった。——目先きの商売にばかり重点を置いていたために、当然、土地本来の生産性は下落する。一六八七年、デマレは記している、——

「すべての土地から上がる収益は減少し、土地所有者が土地から貨幣を引き出すことは極めて困難な現状である」。

十七世紀後半・新興成金のブルジョワ趣味

十七世紀後半、ルイ十四世の治世は、財務総監コルベールの「重商主義」という強力な政策推進の下に隆盛に向かっていった。コルベールの力によって、たしかにフランスの国富は豊かにはなかったが、コルベールがあまりに目先きの利潤追求ばかりを急ぎすぎていたため、儲かったのは貴族と大商人だけであった。——当時のフランスの社会風俗を冷静に観察してそれを精密に記録しつづけたラ・ブリュエール Jean de La Bruyere がその著『カラクテール』"La Caracteres"(一六八八年初版)の中で明確に描き出したように、「新興成金で貴族となる人も多くいたし」(七章27)、王宮を中心とする貴族階級や大商人たちは、有り余るお金で目も眩むような華美な生活をたのしんだ。ラ・ブリュエールの『カラクテール』の中の幾つかの記述を見てみよう。(参照、岩波文庫版、関根秀雄訳)。

新興成金の彼等は「お金を湯水のように使い」(七章10)、その有り余るお金で「家柄と家名を買い、今では、自分の先祖たちが人頭税を払っ

ていたその小教区の殿様となっているのだ」（六章17）。また「金のしこたまある男は、居間をも寝室をもゴテゴテと飾り立て、御殿を都にも一つ、田舎にも一つ持ち、大勢の家来と車馬を擁していて……己の息子を大貴族にすることもできるのだ。それは当然なことで、それは彼の権限に属する」（六章1）。

*

定期的な市の立つ小さな町のことを、ドイツ語で Burg（ブルグ）といったことから、フランス語もそれにあやかって bourg（ブール）といった。――その市のある町で商売をしていった階層が、市民と呼ばれ、日本語では町人といった。――フランス語で「ブルジョワ」bourgeois という。市の立つ小さな町がやがて都市になってゆき、その都市の繁栄を支えていた町人（ブルジョワ）の中から大きな資産をもつ有産者が生れて、この人のことを、同じように「ブルジョワ」といった。お金持ちのことである。この二次的な意味でのブルジョワという言葉が日本に入ってきて、ブルジョワといえばお金持ちと同義に使われてしまった。

フランス語本来の意味の、都市を構成する町人（ブルジョワ）たちは力を得て一つの強い階層を作って bourgeoisie（ブルジョワジー）と呼ばれて、貴族や農民とは違う「市民階級」を指した。

町人の中から成り上がった成金は、急激に猿真似をして、金の威力でこけおどしに飾り立てる。趣味の低い俗人のことを「ブルジョワ」といったのもこの故であり、特に、俗悪低劣な、所謂ブルジョワ趣味のことを bourgeoiserie（ブルジョワズリー）と造語した。――また、町人階層は自分たちの階層意識や階級的思想や趣味を持つようになって、それが bourgeoisisme「ブルジョワジスム」と呼ばれるようになった。ブルジョワ気質、町人根性のことである。

*

宮廷の華美な風俗を大胆に描いたナヴァール女王の『七日物語』（一六六七―七二年）の中にも、「金糸銀糸の衣裳」「真珠や宝石を一面にちりばめた光り輝く絹の衣裳……」などの記述がある通り、ヴェルサイユ宮殿の宮廷服飾は華美を極めた。この宮廷服飾にあやかって、貴族も富裕町人（ブルジョワ）も金ピカファッションに浮身をやつす。ラ・ブリュエールは歎く、――

「かつて町人たちは万事、身分相応にやっていた。彼等の間には服装の差別があって、平民やただの下僕が、由緒ある貴族と間違われたりすることはなかった」（七章22）のに、今では「黄金がフィレモンのキモノの上にピカピカしている」（七章27）。彼等は「絹或いは和蘭絨の長い外套をひっかけ、幅広い帯を胸高に締めなし、足にはモロッコ革の靴、頭には同じ美しいブツブツ革のお椀帽、首には形のよい糊のピンとした襟（カラァ）をつけ、髪はきれいに櫛けずり、つやつやと紅い頬をして朝廷を悠歩し、屢々賑かな町中にもお出かけになる」（二章28）。

しかし、たまには「気取った男がいて、彼は毎晩、明日はどの点でどんなにして人目を引こうか、と工夫をこらして」十七世紀初頭の、つまり、ひと昔前の流行の風俗をする――「長い帽子をかぶり、肩飾りのついた胴衣を着こみ、飾り紐のついた半ズボンに半長靴をはいて」歩き廻った（十三章11）。

――しかし、大抵の貴族や大富豪たちは、豪奢な衣装をつけ、多勢のお

供を従え、壮麗な馬車に乗って、パリの町やヴェルサイユまでのし歩いた。――ごく一部上層だけの華麗な消費文化である。

*

だが、ラ・ブリュエールが喝破したように、「もし皆が衣食に質素であるならば、刺繍屋も菓子屋も無用の長物となり、いくら店先を飾り立てても何にもなるまい。みんなが虚栄と欲から癒されるならば、朝廷には閑古鳥が啼いて、王様はほとんどひとりぼっちになるであろう」（八章12）。

人々は流行を追う。「一つの流行が前の流行を骨折って亡ぼしたかと思うと、それが更に新しい流行に打倒され、それが又、次に来る流行に負ける。我々の軽佻さは大体こんなものである（十三章15）。

華美な流行の蔭に、農民は……

フランス国内すべての流行がルイ十四世の宮廷にはじまる。国王は高価な流行の服を着用する。特に外国から来る大使たちを歓迎する宴会の際には一段と服飾に凝る。例えば、シャム（現在のタイ国）の使者を迎えたとき、国王ルイ十四世は金のレース飾りとダイヤとを縁どりした一二五〇万リーブルもする衣裳を着用したものだ。

当然、貴族たちも国王にあやかる。貴族の夫人たちは、なんと、自分の所領から上る総収入の半分にも及ぶ大金を、衣装や装身具や従僕の費用にあてた。大変な浪費である。貴族の中でいちばん質素だ、といわれたものでも、最低十一人の従僕と二台の馬車だけはどうしても持っていなければならなかった、といわれているほどである。ルイ十四世の寵妾マン・トゥノンの手紙の中に「メーヌ夫人の髪飾り（フォンタンジュ）は、黄金や宝石がバラまかれていたので、その髪飾りの重さは本人の体重より重いのです」という記述があるのを見ても、その華美な風潮は想像できるであろう。

*

華美な風潮は賭けごとにも及ぶ。ルイ十四世の愛人モンテスパン夫人は、一晩の遊びに四〇〇万フランを失ったが、その直後にまたそれを取りかえした、という。取りかえした、というのは稀れな例で、何千人という人が賭けごとのためにその身代をつぶした、といわれている。

*

ルイ十四世の治世といえば、歴史書でも服飾史でも、ほとんどが豪華な王朝貴族の服飾しか綴っていない。

男性は、長髪のかつらを被り、高いひだ襟で首のまわりをしめつけ、黄金宝石で縁飾りをつけた上着は長くて膝までとどき、そこで留め金でとめ、キュロットというピッチリしたズボンをはき、レースをつけた帽子をかぶってヨチヨチと歩いた。

*

女性は、蜂胴のくびれたコルセット、樽のように太い釣鐘スカートに曳裾、高いひだの襟、という服装で、当時の都大路にもヴェルサイユ宮殿の周辺にも一段と高い歩道というものがなかったために水溜りや泥濘を楽にわたれるようにと、高い踵の靴、ハイヒールを履くようになった。――そして、胸の部分の大きな切り込みと乳房の丸い隆起の大胆な露出は、依然として前世紀と変らない。「もし裁縫師が雪をいただく

高い連山を越えないようにすると、貴婦人たちはその裁縫師が自分のところに来るのを断わってしまった」というほどである。こんな例がある――ある貴婦人が裁縫師に上衣の寸法をとってもらったとき、その貴婦人は叫んだ！

――そんなに上の方まで隠さないでちょうだいッ！

＊

当時の宮廷風俗を鋭い諷刺を交えてエロティックに描いたブラントームは、その著『艶婦伝』（一六六五―六年刊）の中で、

「ある貴婦人が、巧妙に詰め物をした繻子のズロースを履いて、更にその上にゆるい白リネンの小ズロースをはき、暗闇で彼女のベッドに忍んできた男に、白ズロースの下にある繻子のズロースを触らせて、それを女の秘部と思わせて、男の鼻をあかす」

という挿話を物語っている。

このブラントームの記述で判るように、もう十七世紀にはズロースというものは知られてはいたが、ズロースをはくということは、老婆の場合は別として、若い女性が乗馬するときだけに許されて、平常はくことは女の恥とされていた、ということである。

＊

とにかく、豪華絢爛のこういう服装は、実は、極く限られた支配階級の人たちだけの服飾であって、中産階級一般の衣服は、ほとんど禁欲的で質素なものだった。男は、上衣が控え目にシャツやズボンや脚部を被っている、というようなものだった。――農牧民となると、もう、それはひどいものだった。

＊

この時代、商工業がめざましく華やかになったのに、本来その繁栄を支えて豊かであるずはの農村や田園は、前の時代に引きつづいて依然として生産性は乏しくて人々は貧しかった。この時代までは一般有識者や文化人たちは、農村や田園の生活に関しては全く無関心だった。――農牧民が極貧の底に喘えいでいても、それは当然のことと思って、誰もそれを事新らしく報告などはしなかった。ところが、ラ・ブリュエールは、フランスの文化史上始めて、その著『カラクテール』の中で、この農牧民の「食べ物にさえ事欠いている胸をしめつけるような」（六章47）惨状を数十行にわたって記録し公けに報告した。――これは、よく教科書などに引用されている有名な一文であるが、ここでは全文を紹介することにする。（岩波文庫版）。

「何やら野獣の如きものが見える。雄もあり雌もあって、野にちらばっている。黒きもあり鉛色なのもあり、何れも陽にやけている。大地にへばりつき、その断ちがたき執拗さを以て掘り且つ耕している。その声には何やら音節がある。腰をおこした所を見ると人の顔をしている。いや、それは本当の人間だった。夜になれば洞窟にかえり、黒いパンと水と草の根とで露命をつなぐ。彼等は生きんがために、他の人間のために、たね蒔き耕し収める労をはぶいてやっている。かくてどうやら、その自ら蒔きたるパンにありつかして貰っている」（十一章128）。

＊

第八章　十七世紀末、フランスの羊毛離れ

ルイ十四世、新教徒（ユグノー）を弾圧

十七世紀後半、太陽王ルイ十四世にはじまるルイ王朝の華麗な奢侈文化に対して、その裏には、みじめな羊毛産業の敗退があった。――それは一種の「あきらめ」にも似たものかも知れない。

顧問官コルベールの強烈な政策推進は、実は、農牧業を商工業の下に従属させることだった。儲かるものを売ればいい、ということで、絹などを使っての華麗なゴブラン織りやレースやハンカチなどの贅沢品を作ることに生産の重点が置かれた。――それならば、一般国民が着る服地などはどうするか、といえば、それはほとんど輸入品まかせであった。海峡一つ隔てた英国から、立派な羊毛加工製品が楽々と大量に運びこまれていたからである。――自国内で細々と紡いだり織ったりするものよりも遙かに良質でしかも大量のものが容易に入手できたのだから、極めて消費的なものの考え方をしていた当時のフランス国内では、ひろびろとした牧場を確保してから苦労して羊を飼い、その羊の毛を剪りとり、それを洗い整えてから時間をかけて糸を紡いでゆく、などという面倒な作業は、次第に問題外とされ、疎外されていった。シャルル・ペローの有名な童話『眠れる森の美女』の中で、王さまが国内で羊毛を紡ぐことを一切禁止して紡ぎ道具をすべて焼き捨てさせた、と語られているのは、この羊毛紡織の疎外視を雄弁に物語っている当時の風潮の証言である。

＊

こういう自然の成りゆきの外に羊毛産業から離れていったフランスの国情の別の大きな誘因として『ナントの勅令の廃止』が挙げられる。

一五八九年ナヴァル王アンリが即位してアンリ四世と名乗ったときからブルボン家の支配がはじまるのだが、新教徒だったアンリ四世は、一五九八年に『ナントの勅令』を発して新教徒に信仰の自由を認めた。三十年に及んだ新旧対立の宗教内乱（通称ユグノー戦争）はこれで終りを告げたのだが、アンリ四世の孫のルイ十四世の時代になると、旧教徒だったルイ十四世は、「一人の国王、一つの法、一つの信仰」という王室専属の説教者ジャック・ベニーニ・ボシュエの言った金言を金科玉条として信奉して、フランス国内の宗教を何とか旧教一本に統一したい、と熱望するようになっていった。

当時、フランス国内には一五〇万人のプロテスタント（新教信者、ユグノー）がいて、商工業においては立派な技術をもっている者が多く、貴重な存在だったため、歴代の顧問官、リシュリューもマザランもコルベールも、彼等の存在を認めていたし、更に一六六六年のフロンドの乱の際には彼等ユグノーは王に対して忠誠を守ったため、王は彼等に感謝したこともあった。

しかし、やっぱり、フランスの統一を熱望するルイ十四世は、政治的にはうまく運んだのに、宗教的にはうまくいかないことが大変に気がかりであった。ルイ十四世は、一六七〇年のころ、自分の回想録に次のように記した。

「余の臣下には、いわゆる改革派の宗教に属する者が多いが、余はこの

悪を憂慮している。……悪は、強い対立物によって新たな刺戟を与えるのではなくて、通りすぎるままにして、気がつかないうちに死滅させなければならない。――余の信念によれば、余の王国のユグノーを次第に減らすための最善の手段は、――これ以上のものを彼等に与えず、また処分を、正義と礼儀が認める最小限の範囲内に限ることにある」

ルイ十四世は、カトリック教会の世職者たちがユグノーを抑圧するのと呼応して、次第にユグノー弾圧に熱を入れるようになっていった。一六六一年、ジェクス地方でプロテスタントの礼拝を違法とする勅令を発した。当時この州には一七〇〇人のプロテスタントがいたが、カトリックでない者がギルド（職人組合）の親方になることは極めてむずかしくなったし、一六六六年には、ユグノーは新しい大学を建てたり上流社会の子弟の教育を目的とする学園をつづけることも禁じられた。更に、一六六九年には、ユグノーの移住は有罪と決まり、万一、脱出を試みて逮捕された場合には、拘留され財産は没収されることになったし、ユグノーの移住を助けた者は、誰であろうと終身の漕役刑に服さなければならなかった。

ルイ十四世は、国内のプロテスタントをカソリックに改宗させることに異常な執念を燃やす。一六八一年、彼は「何を措いても、余には全臣下の改宗と異端の鎮定を達成しなければならない義務がある」と側近に語っている。以前にもまして、ルイ十四世は恐ろしい悪意を以て新教徒ユグノーを威嚇しつづけるのであった。

三二　技術者の群れ「ユグノー」国外へ

同時に、竜騎兵（ドラゴン）のプロテスタント迫害も始まっていた。新教徒（ユグノー）を改宗させるために、陸軍大臣は、竜騎兵を新教徒（ユグノー）の家に宿泊させることを命じた。竜騎兵たちは、あたかも征服地にでもいるかのように乱暴と掠奪とをほしいままにした。――長靴をはき大きな帽子をかぶって横行する竜騎兵たちは「長靴をはいた宣教師」として、ユグノーたちの恐怖の的であった。――同時代の人シャルル・ペローが書いた童話『長靴をはいた猫』の中の風俗は、これを裏から諷刺したものだ、と私は考える。長靴をはいているだけで、人民たちは、この猫の前に平伏してしまうではないか！

竜騎兵のプロテスタント迫害はフランス国内のかなりの広い地域に拡がり、何千人という改宗者が出た。――ほとんどのユグノーは迫害を恐れて改宗を装っていたらしいが、更に、何千というユグノーは、国外移住禁止の法を犯かしてまでも、家や財産を捨ててフランス国境を越えて国外に、そして更に海外の国ぐにへ逃亡していった。――フランス国内に残るユグノーの数は極めて少なくなり、新教信仰の自由を認めた『ナントの勅令』も無意味に思われ出したため、ついに、一六八五年十月十七日、国王ルイ十四世は、「ナントの勅令の廃止」を決定した。

＊

あらゆるユグノーの礼拝と教育はこの日以後禁じられ、ユグノーの聖職者は十四日以内にフランス国内から立ち去るように命じられた。それに反して、一般のユグノーの庶民が移住することは厳禁された。禁を破

れば終身漕役刑の処罰である。ユグノーはカソリックに改宗しなければならなかった。以前にも増して激しい竜騎兵の迫害があった。頑固で改宗に応じないユグノーは略奪や拷問にあった。――一つの記録がある。一部を見てみよう。

殺しさえしなければ、兵士たちは何をしてもよかった。――倒れるまでユグノーにダンスをさせた。彼等を毛皮の中に入れて放り上げた。彼等の口の中に熱湯を流しこんだ。足の裏をなぐり、ひげを引き抜きろうそくの炎で彼等の腕や足を焼いた。赤い炭を手でつかむように命じた。婦人を裸体で道路わきに立たせ通行人の嘲笑と侮辱にさらした。乳飲み子をもつ母親をベッドの柱に縛りつけ、母親の乳を求めて泣く赤ん坊を遠ざけた。母親たちが哀れみを乞うて口を開くと、兵士たちはその口の中につばを吐いた。……

一六八五年のこの宗教上の恐怖は一七九三年のフランス革命の際の恐怖政治よりもはるかに陰惨だったようである。――四十万に余る改宗者は強制的にミサに出席させられた。聖餐式のパンにつばを吐いた何人かは、教会の外で火刑の宣告を受けた。頑固なユグノーの男たちは、地下牢か冷たい牢獄に押しこめられた。

一六六〇年には、フランス国内に一五〇万人ものユグノーが住んでいたのだが、この強い迫害のために、ナント勅令廃止の前後十年の間に、少なくとも三十万人に及ぶユグノーが、見張りの厳重な国境を越えてフランス国外に逃亡していった、と推測されている。

*

では、何故、国王、並びに王の側近たちは、それほどまでに強烈にユグノーの国外移住を阻止しようとしたのか？

それは、実は、ユグノーたちはフランス国内で重要な産業の担い手だったからである。殊に、羊毛などの織物の技術者のほとんどがユグノーであった、といわれている。彼等を国内から失うことは、織物産業を手放すことと同じである。――ユグノー弾圧によって、フランスという国は、織物産業の大半を失い、工業収入は激減し、十七世紀末に、フランスは衰亡してゆく。

それに反して、優れた織物技術者たちをよろこんで迎え入れたプロテスタントの諸国は、彼等を庇護することによって、自国の商工業を豊かに発展させて富の力を増強し、更には、亡命者を入隊させたオランダ軍やイギリス軍は、フランスに対する戦力をも増大していった。

例をあげよう。人口一六〇〇〇人の街ジュネーブには、四〇〇〇人のユグノーの部屋が用意されたし、英国王も、ユグノーに物質的援助を与えて英国の産業の一翼を担わせた。ベルリンでは、十七世紀末には、全人口の五分の一がフランス人になったほどであった。オランダも同様である。

*

ユグノー脱出によって、フランス産業は大きな打撃を受ける。カンの織物工場は消滅し、リヨンとトゥールの絹織り機の台数は四分の一に減少してしまうし、アングモア地方に六〇もあった製紙工場も十六しか残らなくなった。トゥールに四〇〇もあったナメシ皮工場も、今では五十

四しか残らない。商業面でも同様に衰退する。トゥールの町に一〇九軒あった商店も残ったのは八軒だけ。マルセイユなどの港は、地方市場がなくなった結果、衰微してゆく。あれほどコルベールが力を入れて発展させようとした産業なのに、国王の鶴の一声で、忽ち衰亡の一途を辿るようになり、逆にフランスの競争者を育てる結果となってしまったのである。（この項は Wil Durant の Wil Durant の著作等を参照した）

＊

糸紡ぎを禁止した結果、眠れる城として一〇〇年間もの永い眠りにつく――優れた文学者シャルル・ペロー Charles Perault（一六二八―一七〇三年）が一六九六年に著わした『眠れる森の美女』の話は、実は、当時のフランス国の国情や運命を鋭ぐえぐって痛烈な諷刺として描き出したもの、と私は考える。フランスにとって極めて象徴的な寓話の一つである。

ヴェルサイユ宮殿と好戦的な国王

正面の庭園に沿って三二〇フィートの広さをもつ大広間にはゴブランやボーヴェーの綴れ織が壁にかけられ、床には彫刻が並び、美しい調度品などは巨大な鏡に映し出されて「鏡の間」と呼ばれたが、この大広間を中心とするヴェルサイユ宮殿は一三二〇フィートの長さを誇る正面を堂々と打ち出してルイ十四世の威容を象徴する。一六六二年から工事にかかって二十年、「このような建築物は、絶え間ない戦争と共に国庫を破産させてしまう」と顧問官コルベールが王に警告しても、ルイ十四世はとにかく工事をつづけさせて、その完成を待ち切れずに、一六八二年四〇〇〇人の王族廷臣を引きつれてパリからこの宮殿に移転してしまう。三年後には、この宮殿に三六〇〇〇人の人員と六〇〇〇頭の馬が昼夜交代で詰めていたという。――この宮殿の造営のために、一六九〇年ごろまでに約二億フラン（十億ドルを超す額か？）の大金が注ぎ込まれたのだった。

＊

十七世紀末期のフランスという国は、このヴェルサイユ宮殿を始めとする幾つかの豪華な宮殿や城の華やかさを除けば、国内全般は甚だ疲弊し切っていて、社会全般の生活状況は極めて悲惨なものだった。

ルイ十四世は「領土拡大は主権者にとって最もふさわしく最も気持のよい仕事である」と豪語し、「戦争は偉大な国王の当然の使命」と考えて、一六六七年から以後三十年間に及ぶ四回の国際戦争に突入する。

①フランドル侵入―相続戦争　1667―1668
②オランダ戦争　1672―1678
③ファルツ戦争　1683―1697
④スペイン継承戦争　1701―1713

そして、どの戦いにも完勝したわけでもなかったし、またフランス国の領土を拡大したわけではなかったのだが、幾多の名将の名戦術による功績によって、フランス軍隊の強さを他国に印象づけたし、更にフランスの国威と栄光とを国際政局の上に輝やかすことが出来た――という大きな効用はあったのである。

フランスという国が、ヨーロッパ諸国や英国などと比べて、これといって世界に誇れるような産物も工業も文化もなかったから、ヴェルサイ

ユ宮殿を舞台にする宮廷生活の華麗さと大きな軍事力というこの二つだけで、世界の列強の中でのし上がって行って、フランスという国の名を強く世界の人々に印象づけた結果となって、その点では、成功した、といえるかも知れない。——例えば、一六六七年には七万人だった常備軍が、一七〇〇年には四十万人の兵員を擁して、ヨーロッパ大陸随一を誇る陸軍となり、約半世紀の間、この軍事力で国際政局を存分に操ることはできたのであるが、その代り、海外植民地はほとんど英国に牛耳られヨーロッパ大陸内の社会的な国力としてはオーストリーに指導権を握られてしまった。——宮殿造営と軍隊増強と数度にわたる戦い……その代償は、国内の悲惨な疲弊であった。

灰かぶり娘「シンデレラ」はボロの服を着て屋根裏部屋に住み、煖炉の中の残り灰の上に寝起きしながら、舞曲さんざめくお城の大広間に夜毎開かれている舞踏会にキラキラ光る宝石の服を着て参加したい、と強く憧れる——この、世界中の人が知っているシャルル・ペロー Charles Perrault の童話 Cendrillon『サンドリオン』(英語訓みにして「シンデレラ」)の状況描写は、実は、当時のフランス社会における二つの対比を見事にえぐり出したもの、ということができる。——シャルル・ペロー(1628—1703)という文学者は、丁度この時期に生きた人であり、十七世期末期を代表する唯一の文学者である、といわれている。詩人であり文芸評論家であり、創設されたばかりのフランスのアカデミーの有名な会員として活躍した彼は、フランスの地に古くから伝承された昔話を集めて、それを完璧に近い文学的表現で書き綴りながら、その中に当時のフランス社会の様相を鋭く描きこんだ偉大な作家である。

偉大な文学者シャルル・ペロー

童話作家だというと、とかく、恋愛物語や悲劇などを書く作家よりも序列が下だ、という風に考え勝ちだが、これは恐ろしい先入観の誤りである。——シャルル・ペローの、平明で簡潔で自然な行文の中には古典的な優雅さがこめられていて、彼以後二五〇年以上の長い間、地球上ほとんどすべての人々が、「赤ずきん」や「サンドリオン」や「眠れる森の美女」や「長靴をはいた猫」などの話を読み聞かされ、憶えこみ、いつでも直ぐにその話を(原作の文章に忠実に)語り出すことができる、——こういうことは、実は文化史上、大変なことなのである。歴史上のどんな偉大な作家の傑作であっても、ホメロスにしろ、シェイクスピアにしろ、ゲーテにしろ、このペローの諸作品ほど、すべての人々にその全文が愛読され暗誦され語りつがれているような作品が一体ほかに幾編ある、というのだろうか?——シェイクスピアの『ハムレット』にせよゲーテの『若きヴェルテルの悩み』にせよ、その全文を終りまでそらで憶えている人、というのを私はほとんど知らない。——シャルル・ペローのリズミカルな名文は、一たん読んだり聞いたりしたら二度と忘れることのできない強烈な訴求をもって胸の中に叩きこまれてしまうのだ。

そんなペロー童話なのに、日本という国土には、グリムに比べて紹介される機会は大変少なかったようである。『眠れる森の美女』の全文を載せた絵本などは見たこともないし、ドラマティックでリリカルな詩情をただよわせている『青ひげ』などとなると、全くのツンボ桟敷であった。

私がはじめて『青ひげ』の話を読んだときの心のときめきは、今でも忘れていない。原作から忠実に日本語に翻訳したものを更にドラマに構成して、原作者ペローの語り口と同じリズムとイントネイションを日本語に生かしながら、フランス古典劇風な演出で、これを人形劇として日本で始めて私は劇場で上演した。昭和二十二年のことである。優れたフランス文学者であり劇作家であった岸田国士先生は、私の演出になる『青ひげ』他一連の作品を見て下さって、「夕陽の中にある演劇に対して、これこそ黎明にある表現のジャンル」だと激賞して下さった。このペロー『青ひげ』は、昭和二十八年、NHKテレビ放送開始時に、三十分スタジオドラマとして私の脚本演出美術によって放映された。日本初のテレビ人形劇番組であった。――少年時代、夏になると毎年三カ月間パリで休暇を過ごしたが、私たち兄弟は暇があると、リュクサンブール公園の片隅の緑蔭に常設されている野外人形劇場の前に陣取って、そこで上演される「ギニョールとニャフロン」の人形劇に見入っていたものだった。赤ずきんもあったし、長靴をはいた猫もあったし、一寸法師もサンドリオンもその舞台に登場したように記憶している。――そんなフランスのエスプリを、映像的に強く日本に紹介したい、と思って、私は「青ひげ」や「眠れる森……」の映像化と伝達に熱中しつづけて来ていたのかも知れない。

その『青ひげ』の話に戻るが、数人の妻を斬殺したことを隠して美しい娘を妻とした青ひげの持ち主の殿様は、仕事で出張中に、新妻が秘密の扉を開けてしまったため、怒って斬首しようとするが、ぎりぎりの間一髪のところで駈けつけた新妻の兄の竜騎兵のために殺されてしまう、

――という、スリリングでドラマティックな名文で大団円に向かってゆく話なのであるが、この話の終りの「教訓」の部分で、

「こんな恐ろしい夫は今ではもう一人もおりません。やきもち焼きの夫でも、今ではみんな奥様の傍らで、おとなしく糸を紡いでいるのです」

とペローは附記をしている。糸紡ぎは元来は女の仕事であった。千年以上つづいている西欧の生活であったのに、ここでは皮肉にも、従順な夫を象徴する表現として夫に糸紡ぎをさせている。羊の毛を糸に紡ぐ――そんなささやかな手仕事がまだフランスの家庭内でつづいていた、ということになるが、この叙述をよんで、私は少しはホッと安堵した気持になった。フランス国内で全く羊毛が紡がれていなかったという訳ではないのだった。――しかし、その紡ぎは、全く細々としたものだったことは間違いない。スペインからメリノ種の羊が輸入されて「ランブイユ種」が生まれるのは、一世紀後の十八世紀も末期のころだから、それまでは、余り長くしなやかな毛を産出しない、貧弱な種の羊しかフランスには居なかったようである。――家畜史の古典的名著としてコンラット・ケルレルの『家畜系統史』（一九一八年刊）という本があるが、この本をはじめとするどの資料にも、十八世紀以前のフランス国内には、どんな種の羊がいたのかを明確に説明したもの、というのを私は未だ知らない。なにか山羊に似たような短毛の羊が描かれている絵のいくつかは当時のフランスを描いたものの中にあるのだが、深い愛惜や観察の鋭さで描いてはいないのが大半である。羊の国イングランドと大きく異る点である。――絵画はもちろんのこと、羊をうたった歌も童謡も民謡もほ

とんど見受けないし、歴史的な叙述や報告文などにもやはり、羊も羊毛も紡ぎも、殆ど何も出て来ない。——やはり、『青ひげ』の後書きの教訓にいわれているように、せいぜい短かい羊毛を手にもった紡錘でつむいで、自家用の毛糸を作るぐらいだったようである。

イングランドの文学にも童話にも「羊の肉」を食べる、という叙述や表現はほとんど見かけないのに対して、フランスの国となると、屢々、羊の肉を焼いて食べる、という表現を見かけてドキッとする。——フランス人にとって羊は食用のためにあったのだ！

同じペローの『おやゆび小僧』でも、少年が人食い巨人の城にまぎれこんだとき、台所で焼く羊の肉の臭いで人間の体臭をごまかして助かったし、『眠れる森の美女』では、百年の長い眠りからさめて王妃となった姫が、やがて王の実母の人食い女にその子供を殺されて食べられそうになったときも、調理を命じられた料理人は小羊を屠って人食い女をごまかす、という話が、つづけて長々と語られているのである。

フランスでは、当時、羊は羊毛のためにではなく、羊の乳からチーズを作ったりその肉を食べたりするために、気ままに飼われているだけだった、といっても差支えないほど、生活の中に重きを置かれていなかった、といえるであろう。

十七世紀末の農民たちの姿

十七世期末、ルイ十四世はヴェルサイユ宮殿に住んで豪奢な宮廷生活を世界に誇示し、戦争をつづけてフランスの国威をヨーロッパ列強の中にハッタリとして掲げたが、フランス国内は疲弊のどん底におちていた。

庶民の貧しい生活と宮廷の華美な生活、という二つの極端な対比は、実は当時のフランス社会の様相を端的に象徴するものであり、この対比は、ペロー童話『サンドリヨン』（英語で「シンデレラ」）の中の、灰かぶり娘シンデレラの貧しい服装と、継母の連れ子の娘たちの舞踏会服との対比的な描写にもはっきりと出ていて印象深い。——お城の舞踏会に招待された娘たちは、浮き浮きしながら服装の準備を話し合う。

——あたしは赤いビロードの服を着てイングランド製の飾りをつけるわ！

——あたしはふつうの裳裾にするわ。その代り金の花模様のマントを着て、ダイヤのブローチでとめるわ！

そして彼女等は髪を二列に編んで頬につけぼくろまでつけるのである。——ペローは民間伝承のむかし話を土台にして、当時の社会の流行を取り入れて「むかし話」を書き上げた。十七世紀後半になって、「つけぼくろ」が流行したし、金ピカの馬車も登場した。ペローの童話の情景は、ほとんどがその当時の「現代風俗」を取り入れて描かれたものであった。

娘たちの華美を競う服飾に対して、灰かぶり娘には、娘たちの普段着の「黄色い服」さえ着させてもらえないのだ。——しかし、心やさしいシンデレラに同情した仙女の力によって、恐らくほとんど染色もしていない羊毛製の服だったと推定されるが、「この汚ない服は、見る間に、金と銀とでぬいとりをして宝石をちりばめた服にかわった」のである。この白く輝く服は、お城の大広間の貴顕淑女のすべての人の目を奪う美

しさを発揮した。

＊

童話の描写から離れて、当時の史料を見てみよう。十七世紀末期の農民たちの生活を報告した史料がある。紹介する。

「貧農たちは屋根裏つきの一部だけの部屋に住み、その室内には家具もなく、彼等はムギワラの上に寝起きし、衣服といえば身につけているスリ切れて垢だらけのもので、冬の間でも粗末な木靴に素足をつっこんでいただけである。そして食べるものといえば、ライ麦のパンが入手できればそれはまだいい方で、ほとんどが木の根か草の根を食べていた。その上、酒などは滅多には飲めず、肉などは年に二、三回食べられればいい方だった。――それでも彼等に楽しみはあった。祭礼の日の踊りや遊戯だった。楽しみはそれだけだった。――飢死しないだけでもよいと思わなくてはならない状況なのだ」。

＊

この悲惨さは十八世期に入ってもつづく。例えば一七〇七年に、フランス国内の全人口は一八〇〇万人から一九〇〇万人の間と推定されるが、路頭に迷って乞食になった者が二〇〇万人を数えた、というから、全人口の一割前後が乞食だった、ということになる。現代の世界状勢から、こんな悲惨が想像できるだろうか？

一六九七年にシャルル、ペローは『寓意を伴うむかし話、またはコント集』を刊行した。その昔話の中にある「おやゆび小僧」は、グリム童話の「ヘンゼルとグレエテル」と極めて酷似している話だが、やはりグリムとちがうフランス的な情景とモラルをたたえて当時のフランス社会をえぐり出しているのは、さすが詩人ペローの才腕である。『おやゆび小僧』"Le Petit Poucet" の冒頭部分を見てみよう。

＊

むかしある所に、木こりとそのおかみさんがいて、この夫婦には男の子供が七人ありました。いちばん下の子は七つでしたが、この子は体が弱くて、いつも黙りこんでいました。それはすぐれた知恵をもっている証拠だったのですが、両親は、この子はばかだ、と思っていたのです。その上、その子はとても小さくて、生れたときには体がおやゆび程の大きさしかありませんでした。

……

この夫婦はとても貧乏でした。おまけに、七人も子供がいたのですから、尚更こまっていました。

とても苦しい年がやってきました。もう食べる物さえなくなって木樵り夫婦は子供たちを捨ててしまおうと決心しました。

ある晩のことでした。子供たちはもう寝ていました。木こりはおかみさんといっしょに火にあたっていましたが、苦しみに胸をしめつけられながら、おかみさんにいいました。

「おまえにもよくわかるだろうが、わたしたちはもう子供を養っていけないよ。わたしは、子供たちが目の前で飢え死するのを見てはいられない。だから、明日、森へ連れていって、捨ててこようと思っている。それはわけなくできることだ。子供たちがおもしろがって焚木の束をこしらえている間に、そっと、気がつかれないように逃げてくればいいのだ」

おかみさんはいいました、

「まあ、自分の子供たちを捨ててくるなんて、そんなこと、あんたにできるの？」

こんなに貧乏では、そうするよりほか仕方がない、と木こりはいいましたが、いくらそういっても、おかみさんには、とても子供を捨てる気にはなれませんでした。いくら貧乏でも、子供たちのお母さんなのですから。といっても、子供たちが、食べるものもなくなって死んでいくのを見るのは、どんなにつらいことでしょう。それを考えて、おかみさんも子供を捨てる気になりました。そして泣きながら寝床にはいりました。

……

（訳は角川文庫版に拠る）

見事なリアリスムスである。人間の哀しさをただよわす情感の表現には、強く胸を打つものがある。――この『おやゆび小僧』の話も含めた『むかし話集』 "Histoirés ou Contes du temps Passé avec des moralities"――別名『鵞鳥おばさんの話』"Les Contes de ma mère L'Oye" が発刊されたのは一六九七年のことであるが、この発刊の数年前の一六九三年に、実際、フランス全土を被った飢饉があったことなどを思い合わせると、作家シャルル・ペローの並々ならぬ社会観察とその描写力に敬服してしまう。

上流階級独占の服装

こんな農民たちの悲惨さに対して、上流階級の人たちの贅沢な豊かさは、また何ということだろう！――これが同じフランス国内の同じフランス人の姿だとは！

全身は黄金と宝石で飾られ、大礼服や社交服にはベタ一面に黄金のレースや金銀の刺繍や飾り紐がつけられ、ボタンまで宝石であって、靴にも宝石の締め金がつけられ、更に靴下の中にまで宝石が織りこまれたり縫いこまれたりしていた。

当時は作法がきびしかったが、逆に道徳は弛緩した時代だった。そして、衣服は身分を示す象徴であって、階級差別のいちばん大切な方法であった。新しい服飾は常に支配階級から現われてきていた。上流階級の女性の特権は「つりがねスカート」であって、上半身と下半身との接点の腰部を腰紐で強くしめ上げて細く見せかけた上に、コルセットを逆三角形（口嘴型）にして「女らしさ」を誇張した。――必然的に胸部は盛り上がり、乳房は挑発的に半分露出する。つりがねスカートに十二メートル以上も長く伸ばした曳裾をつけて引きずり、サンタ・クララが「何というバカげた頭ではないか！」と慨嘆した「かつら」や「髪飾り」（フォンタンジュ）を高々と結い上げて、高い靴をはいて、威厳をもって、ユッサ、ユッサ、と歩きまわった。

上流のファッションを、中流も下層も真似をしたくなるのは、いつの時代でも同じ社会心理である。――ところが、大抵の都市で、中産や下層の階層の女が、この「つりがねスカート」をはくのを禁じた。女中や百姓女がこのスカートをはいた場合は、早速、牢獄にぶちこまれた。つりがねスカートは上流階級の独占であった。――そんなきびしい差別をしたのに、やはり女は女であった。下層階級の女たちは、自分のお尻や腰を貴婦人と同じように誇張するのを止めなかったのだ。

胸の部分を広く開けて乳房の丸い隆起を丸出しにした上着(デコルテ)の様式は、もう二〇〇年もつづいたファッションである。いかに道学者たちが、この胸開きを「すべての悪の源！」とか「地獄の入口である」とか「世にもすばらしい悪魔のビフテキだ」とか嘆き且つ批判しても、女の上着の襟の切り込みの大きさは大きくなるばかりであった。「女たちは、この襟の切りこみは、少くとも男性の手が二つは楽に入るぐらいの大きさであって欲しいが、もう少し位大きくても差支えないと望んでいる」有様だった。当時の社会風俗を克明に書き残した貴族サンタ・クララは「丸出しの乳房が他人の霊魂までも堕落させる！」と嘆いている。

また、当時出版された『女性の性格論』などという本を見ると、「母親たちは、自分の娘のみだらな服装を許すだけでなく、又それを注文するのにも賛成している」と報告した後で、一つの例をあげて説明している」

ある上流の母親は、男女が集まっている社交の場の中で、自分の娘に向かってこういった、——

「そこに居るバカ娘は、自分の胸をスッポリ包んでいます。私はこんなバカな羞恥心には賛成できません。娘というものは、自分を見せびらかしても構わないものですのよ。だって、娘の胸というのは、この世の中でいちばん美しいものなのですから」

*

金銀宝石の衣裳と広い胸開きのデコルテとつりがねスカートの宮廷の男女たち、——そんな豪奢な宮殿生活に対して、一口のパンもない大衆たち。コルベールの重商主義による商工業の国家統制という大方針も崩壊寸前にあり、農民や商人たちが自由に生産をのばそうとしても政府の規則規則…と規則づくめに押えられ、その上重税、徴兵、と企業も農業も共にその意欲を失なってしまい、生産性も活力も失なってしまったフランスという国。ルイ十四世治世の後半は、文明とか文化とかいえるものではなかった。歴史家としての、ヴォルテールの傑作といわれている『ルイ十四世の世紀』(一七五一年刊)の中で、ヴォルテールは十七世紀後半をズバリいってのける、

「アルプス以北の住民はことごとく、イタリア人に野蛮人呼ばわりされていた。当時のフランス人には、なるほど、どこかこう罵られても仕方のない所があった。純粋な芸術などほとんどなかった。——というのは、実生活と密接な芸術が閉却されていたからである。」

芸術どころか、「術」(クラフト)——生産技術さえもがなおざりにされていた。羊毛を紡いだり織ったり染めたりすることも等閑視されていたのである。後進国であった。

(本学講師＝美術史担当)